

南フランス・ブーシュ＝デュ＝ローヌ県南部の

ロマネスク聖堂 (2)

ーマルセイユとその周辺ー

中川久嗣

Les Églises Romanes dans le Sud du Département des Bouches-du-Rhône (2) :

Marseille et ses alentours.

NAKAGAWA Hisashi

Abstract

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les chapelles, les abbayes et les prieurés de l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au sud du département des Bouches-du-Rhône, surtout Marseille et ses alentours. Au moyen âge, diocèse de Marseille faisait partie du archidiocèse d'Aix-en-Provence, mais Marseille est l'une des plus anciennes villes christianisées de France. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

前稿ではマルセイユのノートル＝ダム＝ラ＝ヴィエイユ＝マジョール旧大聖堂とサン＝ヴィクトール修道院を取り上げたが、本稿ではマルセイユおよびその周辺地域に点在する中世のロマネスク聖堂について、可能な限り知りうるものすべてを訪問・調査し考察を加える。写真画像は筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ (<http://nn-provence.com>) で閲覧可能である。

13.1.1c マルセイユ／サン＝ローラン教会 (Église Saint-Laurent, Marseille)

マルセイユ旧港 (ラシドン) の北側にあつて、サン＝ローランの丘が旧港の入口に突き出るラ・トゥレット (La Tourette) と呼ばれる場所に建っている。ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝マジョール大聖堂からは南へおよそ 400 メートルであり、1668 年にルイ 14 世によって建設されたサン＝ジャン要塞 (Fort Saint-Jean) のすぐ北側である。また旧港をはさんでその南側にある

サン=ヴィクトール修道院のちょうど反対側の位置にあたる。

このあたりには古代にはアポロン神殿があり、サン=ローラン教会はその跡に建てられたとも言われるが正確なことは分らない。9 世紀になると、イスラームの略奪に対してマルセイユ司教バボン (Babon) が城壁を巡らせ、この場所には城塞を築いたとされる (Château de Babon/現存せず)。ただしこのバボンについては 7 世紀の人物であると言われることもあり、やはり正確なところはよく分らない。

サン=ローラン教会の最初の建設はおおよそ 11 世紀後半頃から 12 世紀初め頃とされる。1153 年の教皇アナスタシウス 4 世 (在位 1153-1154 年) の勅書の中に、マルセイユ司教所有の聖堂のうちの 1 つとしてその名が現れる。1234 年には教区教会であった。さらに 1249 年、司教ブノワ・ダリニャン (Benoît d'Alignan/司教在位 1229-1267 年) によってラ・マジオール大聖堂、レ・ザクール、サン=マルタンに次いでマルセイユで 4 番目の教区教会とされ、大聖堂とは別に洗礼と葬儀が行われていたようである。ル・パニエ (またはサン=ジャン) 地区と呼ばれるこの場所には、もっぱらマルセイユの漁師たちが多く住んでいたこともあって、漁師たちの教区教会であった。そして現在まで現存する唯一の教区教会である。なおこの地区にはイタリアのナポリからの移住者も少なくなかったとも言われ、現在でも 8 月 15 日には、金色の聖母像を掲げたナポリ風の行列がマルセイユの街の中を練り歩く。

現在残る建物の建設は 12 世紀終わりから 13 世紀初め頃である。マルセイユから西へおよそ 40 キロのクロヌ岬 (Cap Couronne) から運ばれた多少ピンク色を帯びた黄色い石灰岩の石材で建設された。先に触れたバボンの城塞との関わりははっきりしない。

17 世紀に入るとサン=ローランが手狭になったため、白色苦行会 (pénitents blancs) によってそれと並ぶ形で北側に聖カトリヌ (カタリナ) 礼拝堂 (Chapelle Sainte Catherine) が建てられた。この礼拝堂の献堂はバロック時代初期にあたる 1604 年であるが、全体的な印象はゴシック的であり、同時に 12 世紀のロマネスク的な要素をも保ち続けているとされる。

1668 年のサン=ジャン要塞建設の際に、サン=ローランの西ファサードと身廊第 1 ベイが切り取られた。西ファサードにあったメインの扉口は南側に移され、さらに主後陣が八角形の鐘塔に置き換えられた。この鐘塔には、すぐ北側に付けられているまるで城塞建築のような小円塔の中の螺旋階段を登る。15 世紀と 16 世紀の絵図には西ファサード南側に作られた鐘楼 (13 世紀後半頃のもの) が描かれているが、17 世紀に取り壊されたために現存しない。

よく知られるように、1720 年 5 月から大規模なペスト禍がマルセイユを襲った。8 月 10 日、司教アンリ・ドゥ・ベルサンス (Henri de Belsunce/在位 1710-1755 年) は、猛威を振るうこの疫病を鎮撫するために、勇敢にもマルセイユ市内で行列を行い、サン=ローラン教会の前でミサを行っている。大革命の際には金銀銅の聖具・



13.1.1c Saint-Laurent de Marseille

調度類が徴用され溶かされ、造幣所でインゴットにされた。革命後しばらくの間、サン＝ローランは武器倉庫として使用された。聖堂として祭儀が再開したのは 1801 年のことである。1950 年に歴史的建造物（MH）に指定されている。

サン＝ローランの現存する建物は、彫刻装飾の類いがまったく見られない飾り気のないその外観から、一見したところ聖堂建築ではなく要塞建築のように見えてしまう。鐘塔は八角形で、水平のコーニスによって区切られた 4 つの段からなる。下部の土台部分は 3 つの面を持つ台形である。内部において五角形の主後陣を包み込む形で建てられている。最上段には半円頭形で縦長の開口ベイが 4 つの面に開けられている。そのすぐ下の段との間には、コーニスではなく、最上段に巡っていた周歩廊を支えるためのコルボーが非常に狭い間隔でずらりと並んでいる。このようにたくさんのコルボーを並べる必要が本当にあったのかと思わせるほどの数である。これもこの鐘塔があたかも要塞の塔のような印象を与える理由の 1 つである。

下から 2 段目には、外側を向いた 5 つの面に、それぞれわずかに尖頭形となった窓が開けられている。東面のものは小さく、北東面と南東面のものは縦に長い。これらの開口部は聖堂内部では主後陣に並ぶ窓である。主後陣の北側には、小後陣との間に、鐘塔の上から 2 段目まで立ち上がる小円塔が作られている。一番上の部分にのみ、小さな窓が開けられている。鐘塔の左右にはそれぞれ半円形の小さな小後陣が並ぶ。左右の小後陣には、東端部の上の方に、銃眼のような小さくて細長い開口部が見られる。左右の小後陣は、聖堂内部の南北の側廊に対応しており、その側廊東端の壁には南北ともに大きな丸窓が開けられている。

サン＝ローランの南側外壁には、頂部が三角形となった出張りの大きな扶壁が、内部の各ベイの区切りに対応する形で並ぶ。第 3 ベイには、扉口のあるトランセプト風の建物が作られている。その頭部は三角形のペディメントで、中央に大きな丸窓が開けられている。扉口は古典様式の新しいもので、そこから聖堂内部に入るためには 7 段の石段を上ることになる。聖堂の西側に回ると、やはり扶壁によって区切られた主身廊と側廊の西端壁が 3 つ並んでいる。それらの屋根は切妻形であり、それぞれ切妻の中央に小さな窓が開けられている。左右の側廊のものは半円頭形、中央の主身廊のものは丸窓である。

サン＝ローランの内部は、主身廊とその南北に側廊がそれぞれ 1 つずつ並ぶ 3 廊式である。この形は後期プロヴァンス・ロマネスクでは珍しいものであるとされる。それぞれの身廊は 5 ベイからなる。トランセプトはない。東側には主身廊に対応する主後陣と南北の側廊に対応する小後陣が主後陣の左右に並ぶ。二重となった凱旋アーチの東側の主後陣は五角形で、中央の面には内部に向けて隅切りされた小さな窓が、そしてその左右の面には同じく隅切りされた、より大きな窓（わずかに尖頭形）が開けられている。主後陣の天井には頂点のキーストーン（Clé de voûte）から放射状に広がる 6 つのリブが架けられている。この主後陣は、すでに触れたように 17 世紀に鐘塔の土台部分として再建されたものである。左右の小後陣には水平のコーニスの上に半ドーム架かる。そこにはリブは見られず、それぞれ東端には内部に向けて大きく隅切りされた細長い半円頭形の窓が開けられている。これら左右の小後陣の仕様はロマネスク的である。

主身廊と側廊の天井はほぼ同じ高さで、主身廊には水平のコーニスの上に尖頭形のトンネル・

ヴォールトが架かる。ベイを区切る横断アーチも尖頭形である。この横断アーチは、主身廊両側に並ぶ方形のピア（束ね柱）となって床まで下りる。このピアは、二重になった尖頭形のアーチが連なるアーケードとなって主身廊と側廊を分け隔てている。こうした身廊の構成は、プロヴァンス・ロマネスクの特徴であると言われる。なおこれらのアーチの起拱点には二重のコーニスが付付けられているが、これ以外に聖堂内部には、外部と同じく彫刻装飾の類いは見られない。その力強い簡素さは、シトー派の建築を思い起こさせるものである。

北側の側廊の側壁には、各ベイに、ヴォールトの起拱点に延びる水平のコーニスのすぐ下まで立ち上がる尖頭形の壁アーチ（ニッチ）が付付けられている。しかしそのアーチの内側には、それよりも低い高さの半円形の壁アーチの名残が見られる。側廊のさらに北側に並んでいた礼拝室のものであると思われるが、現在はすべて埋められてニッチとなっている。

Bibliographie :

Baratier, dir. (1990) p.59, p.65; Bouiron (2001) pp.268-269; Hartman-Virnich et al. (2001) pp.283-285.

13.1.1d マルセイユ／サン＝ジャン要塞のサン＝ジャン礼拝堂

(Chapelle Saint-Jean du Fort Saint-Jean, Marseille)

マルセイユのサン＝ジャン要塞は、ラシドン（旧港）の入口の北側にあって、対岸（南側）の巨大な星形シタデルであるサン＝ニコラ要塞とともにルイ 14 世によって 1668 年から建設された。それに先立つ 1648 年から 1653 年にかけて、フランスでは宰相マザランの増税や王権強化政策に反対するいわゆる「フロンドの乱」が、高等法院や貴族たちを中心に起きる。この乱については、わが国ではもっぱらパリにおける動向に目が向けられるが、マルセイユもマザランに対する抵抗の姿勢を見せ、国王軍によって包囲されるなどした。ルイ 14 世は 1660 年に自らマルセイユに遠征し、反対活動を鎮圧した。その後ルイ 14 世はマルセイユの防御とともに監視を行う目的で、そしてまた国王の権威を見せつけるためにサン＝ジャン要塞とサン＝ニコラ要塞を建設したのである。

サン＝ジャン要塞がある場所は、中世のバボンの城（Château de Babon）のすぐ下（南側）にあたるが、この場所にはもともとは 12 世紀後半頃にマルセイユに定着したエルサレムの聖ヨハネ騎士団（聖ヨハネ病院騎士修道会）のコマンドリーがあった（同じ頃にテンプル騎士団もマルセイユにコマンドリーを建設したが、その場所はラシドンの一番奥の、現在アウグスティノ会のサン＝フェレオル教会の建つあたりである）。1202 年に教皇インノケンティウス 3 世がマルセイユの聖ヨハネ騎士団に死者の埋葬許可を与えているので、サン＝ジャンのコマンドリーには騎士団独自の墓地と礼拝堂があったと思われる。騎士団のコマンドリーとラシドン南側の岸（そこには後にサン＝ニコラ要塞が建設される）の間には、外敵の船が港の中に侵入するのを防ぐために長い鎖が張られていた。しかし 1423 年、ナポリを巡ってアンジュー家と対立していたアラゴン王アルフォンス 5 世が艦隊を率いてマルセイユを攻撃・略奪した。マルセイユの港の入口に張られていた鎖はその際に持ち去られ、現在はスペインのパレンシア大聖堂に

保存・展示されている。

こうしたこともあって、1447-1452 年にはプロヴァンス伯のルネ（アンジュー家の善王ルネ、プロヴァンス伯在位 1434-1480 年）が、今後も予想されるアラゴンからの攻撃に備えて方形の強力な塔を建設した。現在もサン＝ジャン要塞の東端に残る「ルネ王の塔」（tour roi René）である。さらに後の時代の 1644-1646 年には灯台を兼ねた高さ約 50 メートルの円塔が建てられた。ルイ 14 世が建設したサン＝ジャン要塞は、ルネ王の塔や灯台塔、そして聖ヨハネ騎士団時代の礼拝堂などをそのまま内部に取り込む形で作られたのである。



13.1.1d Saint-Jean, Marseille

サン＝ジャン要塞にあった聖ヨハネ騎士団のコマンドリー司令官の居館や病院施設は、第二次大戦時にマルセイユを占領したドイツ軍が弾薬庫として使用したが、1944 年 8 月に行われた「マルセイユ解放戦」の際に破壊されてしまった。一方、13 世紀初め頃に建設され、騎士団が退去した後もルイ 14 世の要塞の内部に取り込まれていた古いサン＝ジャン礼拝堂は、そうした破壊を免れて、もともとの形からは姿を変えたものの今日まで残されている。13 世紀以前にあったさらに古い礼拝堂の跡に建てられたとされる。プロヴァンス・ロマネスク後期にあたる 13 世紀のこの礼拝堂は、もともとは 3 ベイからなる単身廊形式であった。その後側廊状に礼拝室が増築され、16 世紀になると西端に半円形の後陣が作られた。17 世紀のルイ 14 世の要塞建設の際に身廊の東半分が失われた。16 世紀の半円形後陣は、今日は外部においては不整形の石が乱積みされた平面形のファサードとなっており、大きな扶壁が 2 つ並び、半円アーチの架かる扉口が作られている。その半円アーチのすぐ上にはセグメンタル・ペディメントが重ねられている。さらにその上にはわずかに尖頭形となった大きな窓があり、一番上にはマルタ騎士団（かつての聖ヨハネ病院騎士団）の援助によって、2007 年に三角形の切妻形頭部の鐘楼が再建されている。そこには鐘が吊るされた半円頭形のベイが 2 つ並べられている。礼拝堂の南側は曲面をなす後陣のような形になっている。礼拝堂のかつての身廊部分は、19 世紀に 3 階建ての居館に改造された。そのため建物の南側には長方形の窓が並んでおり、礼拝堂であったかつての姿は失われている。

西ファサードから内部に入ると、そこは 16 世紀に作られた半円形の後陣である。天井の半ドームにはリブが架けられ、5 つの面に分割されている。身廊の南北の壁面には、ヴォールトの起拱点に水平に延びるコーニスと、そのすぐ下まで立ち上がる半円形の壁アーチ（ニッチ）が残されている。壁アーチを受け止める壁付きの半円柱には植物装飾の施された柱頭が見られるが、その保存状態はあまり良くはない。

Bibliographie :

Baratier, dir. (1990) p.89, p.253; Bouiron (2001) pp.270-272; Busquet (1945) pp.70-71; Duchêne et Contrucci (1998) p.158; RIP.

13.1.1e マルセイユ／エガラードの洞窟隠修礼拝堂

(Grotte-Ermitage des Aygalades, Marseille) 遺構

この洞窟礼拝堂は、マルセイユ市北部第 15 区のレ・ゼガラード (Les Aygalades) 地区にある。マルセイユの北のマリニャンヌにあるマルセイユ・プロヴァンス空港へ向かうオートルート (高速道路) の「A7」の起点は、マルセイユ市内のサン＝シャルル駅とマルソー広場 (Place Marceau) のロータリーの間にあるが、そこからオートルートに乗って北へ約 6.5 キロ行くと、オートルートの西側に面した断崖の 15 メートルの高さの所に、その崖を穿つようにして作られている洞窟礼拝堂の遺構がある。この遺構の西側は私有地 (住宅地) が入り組んでいて直接のアクセスは難しい。したがってこの洞窟礼拝堂は、もっぱらオートルートを走るクルマやバスから見ることになる

伝説によれば、サント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メールに上陸したマグダラのマリアが、サント＝ボームの有名な洞窟にたどり着く前にこの場所にあった洞窟に滞在したと言われる。古代末期頃からここには隠修士が住む洞窟のエルミタージュ (隠修修道院) があったが、この場所に正式に修道院と礼拝堂を作ったのは 13 世紀前半にフランスに定着したカルメル会修道士たちであった (1244 年頃)。1260 年にはマルセイユ司教ブノワ・ダリニャン (Benoît d'Alignan) からこの場所の所有を正式に認められている。カルメル修道会は、もともとは 13 世紀初め (1209 年頃) に創設され、当初から聖地カルメル山において孤高な隠棲生活を行っていたのであるが、1238 年頃に十字軍の終結とともにヨーロッパに移った。ここマルセイユにおける「エガラード」の名は、かつてこの場所に流れていた清流 (aquae latae) に由来する。「カラヴェル川」 (la Caravelle) とも呼ばれたこの清らかな泉水の流れと人里離れた静寂な雰囲気は、彼らカルメル会士にうってつけの場所であったのであろう。ただしカルメル会士の多くは早くも同じ 13 世紀中にここを離れてマルセイユ市内に移り、洞窟に残ったのはわずかな老齢隠修士だけであった。それでも中世の間、この場所には少なからぬ巡礼が訪れ、善王ルネも保護を与えたという。

現在残されている隠修修道院と礼拝堂の遺構は、先に触れたように 1244 年頃から建設が始まった。この年代は通常はすでにゴシック期とされるが、南仏プロヴァンスではロマネスクの最後期にあたる。オートルートに面する断崖に残された石積みによる礼拝堂東壁には、半円頭形の扉口が見られ、クラヴォーがきれいに組まれたそのアーチの様子は、ゴシックというよりもロマネスク적이다。またその扉口の斜め左上には方形柱に支えられた二重に並ぶ半円頭形で縦長のベイ (開口部・窓) が開けられている。これもまたロマネス



13.1.1e Ermitage des Aygalades

ク的であるが、そのアーチはごくわずかに尖頭形であるようにも見える。

礼拝堂内部は、いかにも崖の中をくり抜いた洞窟という感じで保存状態も良くはない。北側が礼拝堂で、一番北側の崩れかけた壁の中程の高さの所に小さな後陣のような半円頭形のニッチが残されている。そのニッチの壁面には、貝殻がずらりと埋め込まれている（部分的に破壊されている）。この貝殻装飾が13世紀のものか、あるいはもっと時代が下ったものであるのかは不明である。洞窟の南側には隠修士たちの生活のための空間が広がっているが、岩盤が削られたままの状態、しかも歳月が経過していることもあって、もとはこの場所が宗教的な聖域であったようには見えないが、カルメル会の最初の姿が山の中の隠棲生活を旨とするものであったことを考えると不思議なことではないのであろう。しかしながらそうした13世紀の静かな観想の場の雰囲気を現在の様子から想像することは難しい。ここを流れていたカラヴェルの清流は、山を切り崩してオートルートが建設されたことによって失われてしまった。周囲には宅地が広がり、洞窟の周囲にもゴミや廃棄物が散らばっている。この礼拝堂の遺構が、1992年に歴史的記念建造物（MH）に指定されたことはせめてもの救いではあるが、荒廃と破壊が少しずつ進行しており、今後の遺構の存続が非常に危ぶまれるのである。

Bibliographie :

『新カト』第2巻（1998）44-49頁；Cantel（1874）pp.377-396；Quemener et Cassely（2017）p.245；Thomazeau（2007）p.24.

Web-site : « Ermitage Notre-Dame du Mont Carmel Marseille（B.d.Rh） »

13.1.1f マルセイユ／レ・リオールのノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ガリーヌ礼拝堂

(Chapelle Notre-Dame-de-la-Galline, Les Riaux, Marseille)

ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ガリーヌ礼拝堂は、マルセイユ都市圏最北端のレ・リオール地区にある。この地区は、海沿いのレスタック（L'Estaque）の西に隣接し、ともにマルセイユ都市圏北部の第16区を構成する。マルセイユの旧港（Le vieux Port）からオートルートの「A55」など地中海沿いの道を通って北へ約12キロ行くと、ヨットハーバーに面してポプラ並木の続く風光明媚なレスタック地区に入る。まるでコート・ダジュールにいるかのような錯覚に陥る。実際、セザンヌやルノワールなどが好んで滞在し、ここの絵を描いている。ヨットハーバーの西の外れあたりで« Pic télémaque／Monté Antoine Castejon »という標示板に従って北に入る。約600メートルで鉄道をくぐるので、そこからさらに「ラ・ネルトの道」（Chemin de la Nerthe）を3キロほど上ると目指す礼拝堂に至る。

ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ガリーヌ礼拝堂は、別名ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ネルト礼拝堂（Chapelle Notre-Dame de la Nerthe）とも呼ばれる。レ・リオール地区のラ・ネルトと呼ばれるこの場所は、マルセイユからベール湖沼（Étang de Berre）やマルティグ（Martigues）に向かう峠道が通り、周辺にはケルト時代からいくつかのオピッドウム（Teste-Nègre, La Cloche など）が存在した。8世紀から9世紀にかけて南フランス沿岸地方がイスラーム勢力によって荒らされた後は、ラ・ネルトは小さな住居がわずかに集まる閑村であった。礼拝堂を見

下ろす岩場には中世の小さな城塞（Château de l'Air）の遺構が残るが、これはこの峠道を監視するためのものであったと思われる。

ラ・ネルトにあった小さなブリウレは、1 世紀にマグダラのマリアらとともにサント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メールに上陸したラザロが、一時この場所に滞在した際に創建したものとも言われるが、これはあくまでも伝説の域を出ない。そのブリウレにあったやはり古い礼拝堂は 9-10 世紀頃にイスラームによって破壊され荒廃した。11 世紀に入って、その古い礼拝堂の跡地にロマネスク



13.1.1f Notre-Dame-de-la-Galline

期の礼拝堂が建てられた。1042 年にマルセイユ司教ポンス 2 世（Pons II、在位 1008/1014-1073 年）が聖別し、ラ・ネルトの教区教会となった。14 世紀には再びここでブリウレが営まれた。大革命の後、この地の住民がほとんどいなくなってしまったため、1806 年に教区教会としての役割を終えた。教区としてはレスタックのすぐ東に隣接するサン＝タンリ（Saint-Henri）に編入された後、1854 年にさらにレスタックに統合された。

現在残るノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ガリーヌ礼拝堂は、レスタックから登ってくる道沿いにある、ほぼ南北方向を向いて建てられている。2 ベイからなる単身廊形式で、第 2 ベイの西側には聖具室、さらに第 2 ベイの北側には物置部屋が作られている。第 1 ベイの東壁に礼拝堂身廊の中に入るための扉口があり、それに並ぶ形で第 2 ベイに半円頭形の窓が開けられ、その北側には物置部屋に入るための扉が作られている。第 2 ベイ西側にも東側と同じ形の窓が開けられている。これらの窓は外側では隅切りされていない。第 1 ベイと第 2 ベイの間には小さな切妻形の鐘楼が作られている。

第 1 ベイの扉口は、外側は半円形のアーチが架かり、内部はセグメンタル・アーチである。第 1 ベイの天井は木組みである。内部でベイを区切るのは尖頭形となった太い凱旋アーチで、内陣でもある第 2 ベイは、扉口の付けられた第 1 ベイよりも南北方向が長い。この礼拝堂で最も古い部分である。ただし 18 世紀に改修されて大きさが広げられた。天井は交差リブ・ヴォールトとなっており、リブは内陣の四隅において方形のピアとなって床まで下りる。内陣の東西に開けられた半円頭形の大きな窓は、内部に向けては大きく隅切りされている。内陣の北西端には聖具室に出入りするための扉がある。

内陣の北壁は平面形である。半円頭形で縦に長いニッチが付けられ、そこには 15 世紀の木製の聖母子像が置かれている。この礼拝堂の名前になっている「ラ・ガリーヌ」は、この聖母子像に由来する。聖母の膝に抱かれた幼いキリストは、左手に小さなニワトリ（ラテン語で「Gallina」）を持っており、今日でも 9 月 8 日の聖母生誕日には巡礼が集まり、この像を掲げて雨乞いや厄除けを祈願する行列が行われる。また礼拝堂には、古くからこの聖母子像を崇敬する近隣からの巡礼が集まったたようで、彼らが納めた奉納額（ex-voto）が堂内にいくつも飾られている。さらに内陣の東壁にも小さなニッチが作られ、聖ロック（saint Roch／聖ロクス）

の像が置かれている。13 世紀末または 14 世紀初め頃にモンペリエで生まれ、ローマへの巡礼の際にペスト患者の看護に尽力したことで知られる。彼もまたこのラ・ネルトを訪れたと言われたりするが、これもやはり伝説の域を出ない。

Bibliographie :

CAG, 13/3 (2005) p.741; Panarotto (2007) p.96; Quemener et Cassely (2017) pp.236-237.

13.1.2 アロー／ノートル＝ダム＝デュ＝シャトー礼拝堂

(Chapelle Notre-Dame-du-Château, Allauch)

アローのコミューンはマルセイユの北東に位置するが、その旧市街のほぼ中心である「ジョゼフ・シュヴィヨン博士広場」(Place Docteur Joseph Chevillon) に面したアローの町役場 (mairie) まで、マルセイユの旧港からだ県道 D4C などを通っておよそ 12 キロである。ノートル＝ダム＝デュ＝シャトー礼拝堂は、旧市街を見下ろす標高 310 メートルの小山の上に建っており、そこからはマルセイユやレスタック、そして地中海の水平線などを遠望できる。町役場から礼拝堂までは、曲がりくねった登り道を徒歩で約 700 メートルである（途中で中世の城門を通る）。

礼拝堂の建つ小山はロディナクスの山 (Mont Rodinaccus) といい、ガロ＝ローマ時代にはケルト＝リグリア系セゴブリージュ (Ségobriges) 族のオッピドゥム (要塞集落) があったとされる。また山の上ではローマ時代の建物の遺構や墓地、陶器類なども見つかっている。この場所には、6 世紀にはすでに僧院があった。9 世紀になるとその周囲に古い集落が形成された。10 世紀には南仏を荒らし回ったイスラーム勢力によってここアローの集落も包囲されたが、深刻な被害は免れたという（アローの紋章がイスラームによる攻撃を表しているという）。

アローの名が史料（マルセイユのサン＝ソヴール女子修道院文書）に現れるのは 11 世紀前半である。1120 年あるいは 1141 年から 1148 年にかけて、マルセイユ大聖堂参事会のイニシアティヴのもとでアローの山が城壁で囲まれた。この城壁には、城門やいくつかの小塔、大きな方形の塔（ドンジョン）などが備えられ、その内側には礼拝堂の他に居館、井戸、住民の住居などが含まれていた。

礼拝堂の名は 13 世紀末の史料に出てくる (Ecclesia Beatae Mariae Castri Alaudi)。14 世紀にはノートル＝ダム＝ドゥ＝ボーヴォワール (Notre-Dame-de-Beauvoir)、あるいはノートル＝ダム＝ドゥ＝ベルヴゼ (Notre-Dame de Belvezer) などと呼ばれた。アローの城塞と礼拝堂は百年戦争の際に被害を受けたが、さらに 16 世紀後半から宗教戦争が始まると、国王に対する反乱軍に利用されることを恐れたマルセイユの都市参事会の要請でアローの城塞が



13.1.2 Notre-Dame-du-Château

破壊された（1595年）。しかし頂上の礼拝堂は取り壊しの難を逃れてそのまま残された。1720年の有名なマルセイユの大ペスト禍の際には、マルセイユに近いここアローにも患者があふれ、集落内の病院に収容できなかった者たちが礼拝堂に詰め込まれた。死者たちは城壁の東側に作られた堀の中に生石灰（酸化カルシウム）をかけて埋められたという。その後、アローの礼拝堂は引き続きマルセイユの大聖堂参事会の管理下にあったが、大革命後の1792年に国有財産として売却された。それでもアローの住民たちの聖母崇敬はやむことはなく、礼拝堂がコミュニティの所有となってもそれは今も続いている。1984年には歴史的記念建造物（Monument Historique）に登録された。1993年には火災によって身廊などが一部焼けたが、翌年から大規模な修復工事が行われて今日に至っている。

現在残るノートル＝ダム＝デュ＝シャトー礼拝堂の建物は、プロヴァンス・ロマネスク後期にあたる12世紀後半または13世紀前半頃にさかのぼる。ただし、長い歴史の中で修復や改修が繰り返されてきた。西ファサードには、7段の石段を登ったところに扉口が付けられ、そこには大きなクラヴォー（組石）が並ぶ半円形のアーチが架けられている。そのアーチのすぐ上には、大きく隅切りされた銃眼のように細長いロマネスク様式の半円頭形の窓が開けられている。西ファサードの壁面は大きさの異なる大まかに整形された石材が積まれている。西ファサードの上に立つマシクーリが付けられた方形の大きな鐘楼は、1859年の修復工事の際に作られた新しいものである。各面に大きな開口ベイが開けられている。1865年に、鐘楼の中央に重量が2400キロの大鐘が吊るされた。一番上には金色の聖母像が据えられている。西ファサードには北側（向かって左側）に、斜め方向を向く聖具室が付けられている。

礼拝堂の南側外壁には古い石積みがそのまま残されている。整形された中小石材が、比較的丁寧に積まれている。また細長い銃眼のような開口部が付けられている。交差部および内陣部分の壁面上部には半円頭形の大きな窓が開けられている。一方、北側の外壁はコンクリートで塗り固められていて、特に見るべきものはない。後陣外部は平面形で開口部はない。

礼拝堂内部は、ベイに区切られていない東西の長い身廊が延びる。身廊部の天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。身廊の東端にはセグメンタル・アーチ形の凱旋アーチが架けられ、3段の石段を上がると内陣である。内陣は、15世紀にあたかもトランセプトの礼拝室のように南北方向に拡張されており、一種の交差部のようにになっている。交差部と後陣にそれぞれ祭壇が置かれている。内部が五角形となっている後陣の中央の面には半円頭形のニッチがあり、そこに17・18世紀の金色の聖母像が置かれている。マリアとイエスは二人とも頂部に十字架が付けられた大きな王冠をかぶっている。アローの人々の崇敬を集めるこの聖母像は、毎年9月8日の聖母マリア聖誕祭に、ここから運び出されて下の旧市街にあるサン＝セバスティアン教区教会まで行列が行われる。古い聖堂と新しい聖堂とを結びつける祭事であると言える。

礼拝堂内には、4世紀以上にわたってここを訪れた巡礼たちが納めた奉納額（ex-voto）や奉納パネルが多数飾られている。最も古いものは1720年の日付がある。それより古いものは飾るスペースが足りなくなったために、残念ながら燃やされて処分されてしまったという。

Bibliographie :

Saurel (1878) pp.214-229; Bousquet-Duquesne et Le Gac (2009) pp.28-29; CAG (13/3)

pp.756-760; Panarotto (2007) p.97; Raynaud (2008) pp.54-55; Verlinden (2005) p.13; RIP.

13.1.3 ロクヴェール／サン＝ヴァンサン礼拝堂

（Chapelle Saint-Vincent, Roquevaire）遺構

ロクヴェールはマルセイユの東およそ 25 キロに位置するコミューンである。オーバーニュ（Aubagne）からだと県道 D96 を北へ約 8 キロである。サン＝ヴァンサン礼拝堂の遺構は、ユヴォーヌ川 (l'Huveaune) の右岸にある。街のほぼ中心にある役場から D96 をさらに北へ 750 メートル行ったところにロクヴェール市の建設用重機管理センター（CTM）があり、その敷地の中の南の端に残されている（通常はアクセス不可）。

長い歴史の中で多くの改修の手が加えられてきたことと保存状態が良くないことから正確な建設年代は確定するのが難しいが、おおよそ 10-11 世紀頃に建てられたもので、プロヴァンスでも最も古いものの 1 つとされる。伝説によればクローヴィスの息子の一人キルデベルト（Childebert、生没は v.497-558 年）がここに聖堂を建設したという。8 世紀以降イスラームの侵入によって破壊された後、10 世紀になってプレ・ロマネスク様式で再建された。13 世紀にはユヴォーヌ溪谷のこの礼拝堂が建つ場所は、ジェムノスのサン＝ポンス女子修道院[13.1.4a]の所有する土地の一つであった。しかし時代が下り、17 世紀頃にはこの礼拝堂が使用されることも少なくなり、18 世紀に入る頃にはわずかな隠修士が礼拝堂の北側に隣接して作られていた小さな建物に住むだけとなってしまった。その後は完全に放棄されたようである。大革命の後、1796 年に国有財産として売却され、家畜小屋や農業用倉庫などに転用された。現在はロクヴェールのコミューンが所有している。

現在この礼拝堂には、全体を保護するために金属製の屋根が架けられている。全長は外寸が約 16 メートル、幅 7 メートルで、身廊はおおよそ東西方向を向いている。斜面に建てられており、身廊北側は土砂で埋められている。西ファサードには中央にセグメンタル・アーチの架



13.1.3 Saint-Vincent, Roquevaire

かる扉口と、そのすぐ上には扉口のアーチに接するようにして隅切りされた大きな丸窓（直径 0.6 メートル）が開けられている。西ファサードや南側外壁は、不整形の小石材がラフに積まれている。この身廊部南側には西端と東端にそれぞれ扶壁の名残が認められる。また中央に半円頭形の出入口が 1 つ、そして向かって右端の後陣側に小さな方形の出入口が 1 つ開けられている。

身廊東側の壁面は、今は石積みで埋められて平面形となっているが、中央に半円形のアーチの石組みが残されていて、かつてはその東側に、天井が半円筒形のヴォールトあるいは半ドームの架かる後陣が作られていたものと思われる。ただし身廊がさらに東側に延びていたという可能性も考えられる。仮にそれが後陣であったとして、その平面プランが方形であったのか半円形であったのかは定かではない。この後陣の外（南側）には建物の土台部分の石積みが残されている。また床石と小さな地下空間のようなものも残されているが、これもオリジナルのものか後世に作られたものかは不明である。

礼拝堂内部は東西約 12.5 メートル、南北幅約 3 メートルの単身廊で、多少セグメンタル形となった半円形の横断アーチとそれを受ける方形のピラストルによって 3 つのベイに区切られる。東端のピラストルだけは、水平に横筋のモールディングが付けられた平たいインポストがアーチを受け止めている。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトである。

礼拝堂内からは 2 世紀の墓碑が見つかっており、もともとここは古代の墓地であったのではないとも言われる。この墓碑には、ルキウス・ウリティウス・アウイトゥスなる人物が、愛する妻であるユリア・マルセリーナ（*Iulia Marcellina*）のために捧げると刻まれている。また床からは古い石棺や人骨、陶器類の破片なども見つかっている。ロクヴェールのサン=ヴァンサン礼拝堂は、保存状態は決して良くはないが、1990 年に歴史的記念建造物（MH）に指定されている。

ロクヴェールの現在のサン=ヴァンサン教区教会（*Église Saint-Vincent*）は、町役場の 50 メートルほど北にある。建物は 18 世紀の古典様式で建てられた新しいもので、フランスでも最大規模のオルガンが据えられているので知られる。聖堂内には、5 世紀からロマネスク期にかけてのものと思われる古い祭壇テーブルが置かれている。その大きさは横 1.8 メートル、奥行き 0.7 メートル、高さ 0.15 メートルの長方形である。もとはロクヴェールの旧サン=テュゼーヴ礼拝堂、別名サン=テティエンヌ礼拝堂（*Chapelle Saint-Estève ou Saint-Etienne*／役場から D96 を南へ約 1.5 キロの丘の上。今は民家に改造されておりアクセス不可）にあった。1883 年に発見され、その後現在のサン=ヴァンサン教区教会に移された。そもそもこのサン=テュゼーヴ礼拝堂の建設は 11 世紀から 12 世紀にかけてと思われるが、もしも祭壇テーブルがそれよりも古いものであるとするならば、この祭壇テーブルは、より古くは、サン=ヴァンサン礼拝堂に置かれていた可能性もあると思われる。

Bibliographie :

Arnaud (1993) pp.13-44; *CAG* (13/3) pp.862-865; Narasawa (2015) pp.274-275; Raynaud (2008) pp.38-39; Saurel (1878) pp.353-368; Servan (1960) pp.189-221.

13.1.4a ジェムノス／サン＝ボンズ女子修道院（Abbaye de Saint-Pons de Gémenos）

ジェムノスは、オーバーニュの東側に隣接するコミューンである。例えばオーバーニュの市役所からジェムノスの町役場までだと、直線距離にしておよそ 5 キロである。その役場(mairie)はジェムノスの街のほぼ中心にあるド・ゴール將軍広場にあり、そこから県道 D2（サン＝ボンズ通り／Rue Saint-Pons）を 2.5 キロほど東へ進んだところで、サン＝ボンズ溪谷の森の中に通じる遊歩道へと徒歩で分け入る。しかし D2 から森に入るあたりには駐車場はまったくない。もしもクルマで行く場合は、ジェムノスの役場から東へ約 2 キロのところにサン＝ボンズ県営駐車場があり、そこから遊歩道の起点まで D2 を 800 メートルほど歩くことになる。

このあたりはジェムノスからさらに東のサント＝ボーム山脈へ向けてサン＝ボンズ溪谷が続く緑豊かな県立公園となっている。静かで美しい森の中を、途中に小さな滝などもあるフォージュの溪流（Le Fauge）に沿って遊歩道を 1.2 キロほど進むと、サン＝ボンズ・シトー会女子修道院に至る。サント＝ボーム山脈に連なる山々を背景に、静かな森に囲まれ、清らかな溪流のほとりに建つその姿を見ると、それはまさしくシトー修道会の求める美しくも静謐な祈りの場であったことが理解できる。なおここからマグダラのマリアが晩年を過ごしたとされる有名なサント＝ボームの洞窟（Grotte Sanctuaire de la Sainte-Baume）までは、東へ向けて直線距離にしておよそ 9 キロである。

もともとこの地はマルセイユ司教ボンズ 2 世（在位 1008-1073 年）が所有し、そこにあった農場の建物が「サン＝ボンズの家」と呼ばれていたとも言われる。またマルセイユ大聖堂参事会がジェムノスにサン＝マルタン、サン＝クレール、サン＝ジャン＝ドゥ＝ガルギエ、そして古いサン＝ボンズの各聖堂を所有していたらしい。確かなのは、1205 年にガルサンド（Garcende／Garsende）なる女性が、マルセイユ大聖堂参事会から土地を与えられ、時の司教レニエ（Rainier, 在位 1188-1214 年）の許可を得てこの地に女子修道院を創建したことである。このガルサンドがどのような出自・身分であったのかは正確には分からないが、マルセイユの名門一族の出身であったと思われる。彼女が修道院長となったサン＝ボンズ修道院は、シトー修道会の傘下に入り、プロヴァンスにあつては、有名な「三姉妹」すなわちセナンク、シルヴァカーヌ、ル・トロネに続く 4 番目のシトー会修道院となった。

その運営や霊的指導などは、直接にはル・トロネ修道院の管理下に置かれた（サン＝ボンズ修道院長は同時にマルセイユ司教に対しても服従を誓ったとされる）。

その後創建者ガルサンドの貢献もあってサン＝ボンズ修道院の名声は高まりを見せ、プロヴァンス伯、マルセイユ副伯、そしてレ・ボー家など俗界領主たちから多くの寄進を受けて繁栄した。A. Saurel によれば、アラゴン王ペドロ（2 世、在位 1196-1213 年）もいくつもの領地を寄



13.1.4a Saint-Pons de Gémenos

進している。かくしてサン＝ポンス修道院は、13 世紀半ばに最盛期を迎えた。在籍する修道女（その多くはプロヴァンスの貴族の家系）の数も 40 名にのぼった。また巡礼たちも多くここを訪れるようになった。マルセイユやオーバーニュ方面から来た巡礼たちはサン＝ポンスを経由し、山道をたどってマグダラのマリアの聖地サント＝ボームの洞窟へ向かったと言われる。

13 世紀に入ってサン＝ポンス修道院は 3 つの分院を保有した。最初のものは、カヴァイヨンとサン＝レミ＝ドゥ＝プロヴァンスの中間に位置するノートル＝ダム＝ドゥ＝モレジェス修道院（Abbaye Notre-Dame de Mollégès）で、早くも 1208 年に創建された。貴族の女性サクrist タース・ドゥ・ポルスレ（Sacristane de Porcelet、生没年不詳）がこの地をサン＝ポンス修道院に寄進したことによる。しかし 15 世紀には戦乱や疫病のために放棄され、その後アプトのサント＝クロワ王立修道院に統合された。1763 年には女子修道院として復活したようであるが、結局は大革命によって終焉を迎えた。現在シトー会修道院の面影を感じさせるものはなく、かつての修道院の建物を取り込む形で建設された城が残されている。

サン＝ポンス修道院は、続いて 1220 年（または 1221 年）頃に、現在のヴァール県イエールの海岸近くの古代オルビアの居住区（もともとは紀元前 4 世紀前半頃にマッサリアがギリシア人の植民・交易のために築いた拠点都市であった）にサン＝ピエール＝ドゥ＝ラルマナール修道院（Abbaye Saint-Pierre de l'Almanare）を創建した。もともとここにはベネディクト派のサン＝ジェルヴェ＝ドゥ＝フォス修道院（Abbaye Saint-Gervais de Fos）の分院があったが、規律の弛緩などもあって、サン＝ポンスから修道女が送り込まれ、サン＝ポンスの管理下に置かれたという。1223 年には 12 人、1330 年には 29 人の修道女がいたと伝えられる。しかし 14 世紀末～15 世紀初め頃には戦乱や略奪、ペスト禍などもあって、修道女たちはこの場所を放棄してイエール城壁内のサン＝ベルナル女子修道院（Couvent Saint-Bernard d'Hyères）に移ってしまった。現在、ラルマナール修道院は、イエールの古代オルビア遺跡の中にその遺構が残されている。東西方向に向いた 2 つの身廊と、それに続く 2 つの後陣から構成されている。ただしサン＝ポンス本院やル・トロネに比べて、かなり小規模なものだという印象を受ける。

最後はマルセイユのノートル＝ダム＝デュ＝モン＝シオン修道院（Abbaye Notre-Dame du Mont-Sion de Marseille）である。1242 年頃に、サン＝ポンス修道院長ニコル・ド・ロクフォーール（Nicole de Roquefort）の一族の者からの援助を受けて創建された。最初の場所はマルセイユのラ・プレーヌ地区（現在のジャン・ジョレス広場。旧港東端から東へ約 600 メートル）であったが、1361 年に百年戦争などの戦乱のために破壊され、マルセイユの城壁内（現在のサン＝シャルル駅のすぐ南のコンヴァレッサン地区）に移転し、病院なども運営した。この修道院はマルセイユの南のルミニ（Luminy）にも地所を所有していた。しかし 16 世紀半ばから衰退期に入り、その後大革命を迎えた。

このように繁栄を誇ったジェムノスのサン＝ポンス修道院であるが、14 世紀半ばになると、百年戦争などの戦乱、ペストなどの疫病、規律の弛緩などによって衰退期に入る。経済的苦境も続き、修道女数は激減した。A. Saurel によると、15 世紀に入る頃にはサン＝ポンスに残っていたのは修道院長と修道女一人だけになっていたという。1407 年、サン＝ポンス修道院は先にも触れたように、イエールのラルマナール修道院と合併し、ジェムノスの修道女たち（修道

院長ブグレテ・ブランと修道女バルトロメ・ペロン）はサン＝ポンスを放棄してアルマナールに移った。

1413 年、プロヴァンスでも有数の封建領主一族のアリクス・デ・ボー（Alix des Baux）が、ラルマナールの修道院長から同意を得てサン＝ポンス修道院の復興に取りかかる。レ・ボー家は、ジェムノスにも領地を所有していたのである。アリクス・デ・ボーは荒廃・損壊が進んでいたサン＝ポンス修道院の建物の修復・再建を進めるなどした（後述）。しかし 1426 年に彼女が没するとそうした動きも止まってしまった（なおアリクスはレ・ボー最後の領主で、彼女の死後その領地はプロヴァンス伯に接收された）。アリクスの復興事業によってジェムノスに戻っていた修道女たちは、再び止むことのない政争、盗賊、疫病、貧困などに直面することとなり、結局はサン＝ポンス修道院を放棄して、イエールのラルマナールやマルセイユのモン＝シオンに移った。サン＝ポンス修道院は 1736 年までラルマナールが所有したが無人のままで大革命を迎えることとなる。

サン＝ポンスの谷は、16 世紀になってマルセイユの裕福な事業家であったアルベルタス家（Les Albertas）が購入・所有し、その後製紙工場やガラス工場などを建設した（それらの遺構は今も残っている）。1736 年には、アルベルタス家はラルマナールの修道女たちからジェムノスの地所を購入し、サン＝ポンス修道院の建物は狩りのための宿泊施設などとして使用された。大革命の後、修道院の土地と建物は所有者がさまざまに変わったが、1972 年になってサン＝ポンス県立公園が作られ、旧サン＝ポンス修道院の建物は現在はブーシュ＝デュ＝ローヌ県の所有となり、定期的にコンサートや展覧会などのイベントに利用されている。なお修道院の建物は 1926 年に歴史的記念建造物（MH）に登録されている。

今日のジェムノスのサン＝ポンス・シトー会女子修道院は、東西に長い聖堂の身廊と、その南側に東翼と西翼の修道院の建物が残されている。建物は全体的にシトー修道会建築の基本原則に忠実に建設・配置されている。

身廊の外寸は、東西約 48 メートル、南北約 7 メートルである。もともとは主身廊とその南北両側に側廊が並ぶ三廊式の大規模なものが計画されていたが、（完成されたものが取り壊されたのではなく）建設途中で当初の計画が変更され、主身廊と北側の側廊は、そもそも建設すらされることなく、先に建設されていた南側の側廊部分のみが現在の主身廊として残されることとなった。もしも三廊式で完成されていたら、ル・トロネに匹敵あるいはそれを上回る規模になっていたと思われる。当初の建設計画は、現在の身廊の北側に見られるそのピア（束ね柱）の土台部分からうかがい知ることができる（ただしその土台部分はコンクリートで作られた最近のものである）。建設計画が変更・縮小された時期と理由についてははっきりしたことは分からないが、サン＝ポンス修道院をめぐる 14 世紀になってからの政治的・経済的状況の悪化によるものと思われる。先に触れた 15 世紀に入ってからのアリクス・レ・ボーによる復興・再建事業においても、かつてのような精緻な工事はかなわなかったようで、現在残る聖堂の建築にもそれが現れている。壁面の切石やその積み方の精度が、諸状況の悪化以前と以後では明らかに異なっているのである。最も古い部分（すなわち経済的に恵まれていた 13 世紀初め頃の部分）

は、現身廊の第3ベイ、第4ベイのヴォールトと内陣、その外側（後陣）に付けられた扶壁、さらに身廊西側のベイの下部と西ファサード下部などである。それらの部分は精巧に切り出された硬質の石灰岩がていねいにきっちりと積み上げられている。

高さが14メートル以上ある西ファサードは、南北（左右）両側に強力な扶壁が作られ、強固な量塊感が印象的である。扶壁の間には、一番下に大きな尖頭形アーキヴォルトが架けられた扉口、その上には隅切りされた半円頭形で縦長の窓、一



13.1.4a Saint-Pons de Gémenos

番上には水平のコーニスの上に、隅切りされた丸窓が開けられている。外側から見ると、一番下の扉口は西ファサードの壁面の中央に作られ、その上の縦長の窓と丸窓はわずかに北側（向かって左側）にずれている。しかし聖堂内部から見ると、身廊の中心軸からずれているのは一番下の扉口の方である。西ファサードの扉口から上の部分と、扶壁のラルミエ（larmier／水平のコーニス）から上の部分は、それらより下の精巧な部分とは切石の形と積み方が異なる。先にも触れたように、これは建設時期の違いと修道院の経済的状況の変化を表している。

西ファサードの扉口の尖頭形アーキヴォルトのすぐ上の壁面に、レ・ボー家の十六芒星（光の放射角が16ある）が彫刻された四角い石がはめ込まれている。15世紀初めのアリクス・デ・ボーによる復興・再建の際に組み込まれたものであろう。この星はベツレヘムの星で、レ・ボー家は、バルタザールの子孫であることを自称していたのである。西ファサードの最上部にはかつては鐘を吊すベイが2つ並ぶ鐘楼があったが、現在はその基壇部分が残るのみである。まるで城塞建築によく見られる方形のメルロンが3つ並んでいるかのような光景である。鐘は1584年に寄贈されたが、その後失われた。

西ファサードの扉口から聖堂内部に入ると、東西約40メートルの長い身廊が続く。4ベイからなる単身廊形式で、トランセプトはない。先にも触れたように、もともとの建設計画では南側の側廊として作られたものである。各ベイを区切るのは、二重になった横断アーチで、わずかに尖頭形である。身廊の天井も同様にわずかに尖頭形となったトンネル・ヴォールトが架けられているが、横断アーチを見なければそれが尖頭形であるとは分からない程度である。このヴォールトの高さは約14メートルであるが、建設計画変更によって、北側に連なっていた尖頭形の壁アーチが埋められた後にかさ上げされたものと思われる。

現身廊西側の第1ベイと第2ベイの建設（あるいは修復）は、それより東のベイよりも後の時期のものであり、その工期は、アリクス・デ・ボーによる修道院復興の時期（15世紀前半頃）のものであると思われる。身廊北壁は、各ベイにおいてヴォールトの起拱部に水平に付けられたコーニスの所まで立ち上がる大きな壁アーチ（わずかに尖頭形）が並ぶアーケードとなっている。それらの壁アーチは、現在はニッチであるが、主身廊と北側の側廊の建設計画が放棄された後で塞がれたものである。ベイを分ける二重の横断アーチは、身廊南側ではそのまま二重

のピアとなって地上に降りるが、北側では壁アーチを受ける柱も重なって三重のピアとなっている。これらのピアには柱の基壇も柱頭彫刻もない。ただしアーチの起拱部には装飾的なモールドディングによるインポスト（または短いコーニス）が付けられている。

身廊南側には、第2ベイに助修士の扉、第4ベイには修道女の扉があつて、クロワトル（そしてそれぞれの翼棟の建物）との間の出入口となっていた。身廊第1ベイ北側には大きな尖頭形アーチを介して方形の礼拝室が作られている。アリクス・デ・ボーによる修道院復興の時期のものである。このアーチは主身廊建設の計画放棄の後に作られたもので、計画放棄の証左であると言える。

現在の身廊東端は、シトー修道会に常に見られる方形（平面形）の内陣である。この内陣には身廊側から数段の石段を上る。二重になった尖頭形の凱旋アーチで身廊と区切られている。身廊のヴォールトよりも3メートルほど低い位置にある内陣の天井は、ゴシック的な4分交差リブ・ヴォールトである。内陣の東端の壁（平面形の後陣壁）には、中央下に二重に縁取りされた縦に長い半円頭形の窓が開けられ、その上にはそれよりも小さな長方形の窓が2つ並ぶ（内部に向けて隅切りされている）。

聖堂外部に出ると、まず現身廊北壁に、内部の横断アーチに対応するようにして、南北方向に長い強固な扶壁の並ぶ姿が目に入る。これらの扶壁は三廊式の建設計画が放棄された後に作られたもので、扶壁の間には、埋められた二重の壁アーチが残されているが、それは西側の2つのベイでは3重、東側の2つのベイでは2重になっている。扶壁には水平のコーニス（あるいはラルミエ）が付けられており、それを境に上半分は厚さが少なくなっている。下半分は13世紀、上半分はアリクス・デ・ボーの再建・復興期のものである。第1ベイの下半分は方形の礼拝室となっている。その上には身廊の壁アーチが残されている。

身廊北壁には、第2ベイに半円頭形の出入口が開けられている。また東端の第5ベイには、モールドディングで縁取られた半円形アーチの架かる大小2つのニッチが作られている。向かって左側のものは、聖具などを置くためと思われる石のテーブル（3つのモディオンに支えられた大きなスペースがある）を備えており、向かって右側の大きなニッチは、同様の小さめの石のテーブルが奥にあり、手前には丸いシンクのようなものが2つ並んでいる。それぞれに細長い排水口が開けられている。祭儀で用いた聖水を排水するためのものか、あるいは聖具などを洗うためのものか、でなければ単なる洗濯場なのか、正確な用途は分からないが、これらのニッチは全体として建設当初の精巧な切石で作られており、三廊式計画が放棄される前に、主身廊東端の内陣において使用することを想定して作られたものであったのかも知れない。2つの半円頭形ニッチのさらに向かって右側にも小さめの四角いニッチが残されている。

方形（平面形）の後陣は、その左右両側を強力な扶壁で支えられている。最初の建設計画では、この部分は南側の側廊東端の小後陣として作られた。北側の扶壁は、最初計画されていた主身廊の後陣南壁とそれを支える扶壁となるはずのものであった。後陣の中央下部には二重アーチの架かる半円頭形で縦長の大きな窓が開けられ、その上には縦長の小さな方形の窓（隅切りあり）が横に2つ並んでいる。後陣の最上部は三角形の切妻形である。

身廊の南側外壁は、かつてのクロワトル（内庭回廊）に面していた。ただし、クロワトル自



13.1.4a Saint-Pons de Gémenos

体は未完成あるいはそもそも建設されずに終わっている。聖堂第 2 ベイには助修士の扉、第 4 ベイには修道女の扉が開けられている。Guyonnet-Dupeyrat (1979) は、この 2 つの扉が壁で埋められていると記しているが、現在は復元・開通されている。第 4 ベイの修道女の扉は、大きくて見事なクラヴォーによってアーチが組まれ、さらにそのアーチの外側を縁取るように半円形のモールディングが付けられている。南壁には、中ほど少し下の所に水平のモールディングと、かつてのクロワトルのヴォールトの起拱部（基部）の痕跡が残されている。さらにクロワトルの周歩廊のトンネル・ヴォールトに架けられていた（あるいは架けられることが計画されていた）横断アーチを受けるモディオン（持ち送り彫刻）が、第 2 ベイと第 3 ベイの間の位置に 1 つだけ残されている（それを受けていた柱はない）。そのモディオンには様式化された葉飾り彫刻が施されており、これはサン＝ポンスにおける数少ない装飾的彫刻の 1 つである。

聖堂南壁上部には、身廊内部の 4 つのベイに対応する形で二重隅切りされた半円頭形で縦長の窓が開けられている。第 2 ベイと第 4 ベイの窓には、頭部のアーチ部分にそれを縁取るモールディングの一部が残されている。これらの窓の形や配置は、ゴシック様式を合わせ持つシトー会建築におけるロマネスク的な要素である。なお南壁外壁の内陣に相当する東端のベイの左右（東西）両側には、強力な扶壁が付けられていた跡が認められ、さらに東翼棟の天井のヴォールトに架けられていたリブの一部も残されている。

クロワトルは正方形であるが、内庭を取り囲んでいた歩廊アーケードは、今は完全に失われている。西田ほか（2009）によれば、そもそも歩廊アーケードは建設されなかった可能性が高いという。ただし身廊南側外壁には歩廊のトンネル・ヴォールトが作られたか、あるいは計画された跡が見られる。

クロワトルを取り囲むように修道院の建物が部分的に残されている。これらもまた未完成に終わったのか取り壊されたものなのか、正確なところは分からない。クロワトル東側の翼棟はシトー会の修道院建築プランの原則に従って、聖具室をへて集会室や修道女たちの居館が作られている。集会室（参事会室／salle capitulaire）は 15 世紀初め頃のアリクス・デ・ボーの復興事業によるものとされる。この建物の西側の壁は基壇しか残されていないが、東側の壁は 3 メートルの高さまで残っている。東側の壁には窓が 3 つ並んで開けられている。またやはり同

じ東側の壁には背の低い出入口が外部に通じていたが、今は塞がれている。集会室の天井は今は失われているが、ゴシック様式である 4 分交差リブ・ヴォールトが架けられていた。東壁にはリブを受け止めるモディオンが残されている。植物文様や人間の頭部の彫刻が施されている。シトー会では珍しい装飾であると言える。現在、集会室の場所には、鉄製の骨組みによってかつてのベイ、横断アーチ、リブ、それらを受ける柱などが再現されている。東翼 2 階には共同寝室 (dortoir) があった。聖堂内陣の南側外壁に、そこに架けられていた尖頭ヴォールトの痕跡が残されている。集会室のさらに南側には 13 世紀終わり頃に作られた修道女たちの建物があつたが、今は何も残っていない。



13.1.4a Saint-Pons de Gémenos

クロワトル西側の翼棟は助修士 (converse) や使用人たちの建物である。サン＝ポンスに対する管理・指導を司るル・トロネ修道院から男子修道士がやって来た場合にも使用された。マルセイユ司教や大聖堂参事会員などの訪問もあつたようである。3 つの部屋が南北方向に並んでいる。東西の外壁は 13 世紀頃のものであるが、18 世紀から今日に至るまで修復改築の手がかなり加えられている。西側外壁に見られる開口部も、すべて 19 世紀以降のものである。

クロワトルの南側には建物は何も残っていない。共同食堂 (réfectoire) は、「プロヴァンスの三姉妹」などでは、クロワトルをはさんで聖堂と反対側に（つまり聖堂から離れたところに）作られた。ここサン＝ポンスでもそれらと同じくクロワトルの南側にあつたと推測されるが、正確な場所は今となってはよく分からない。

Bibliographie :

中川 (2017) 73-96 頁; 西田ほか (2009) 909-912 頁; Allais, Démians Archimbaud, Pelletier (1981) p.280; Barbut et Nourry (2012) pp.62-63; Besse (1909) p.107; Guyonnet-Dupeyrat (1979) pp.131-151; Hartman-Virnich (2001) p.125; Morel (2008) pp.84-85; Raynaud (2008) pp.41-42; Saurel (1863) pp.33-56, pp.63-65; Saurel (1878) pp.269-288; Verlinden (2005) p.143; La Ville d'Hyères-les-Palmiers, éd. (2013) p.17; RIP.

13.1.4b ジェムノス／サン＝マルタン礼拝堂 (Chapelle Saint-Martin, Gémenos) privée

ジェムノスのサン＝ポンス女子修道院のおよそ 1 キロ西に位置する。サン＝ポンス県営駐車場から、県道 D2 を 800 メートルほど歩き、サン＝ポンス修道院へと向かう遊歩道に入り、さらに 150 メートルほど行くと、遊歩道の北に小さくて素朴なロマネスクであるサン＝マルタン礼拝堂が見えてくる。遊歩道の反対側（南側）およそ 50 メートルのところには、17 世紀に建てられたル・パラドゥー (Le Paradou) の製紙工場の遺構が残されている。

最初にここにあつた古い礼拝堂の建設は 10 世紀後半または 11 世紀初め頃とされる (1080



13.1.4b Saint-Martin de Gémenos

年にはその名前が史料に出てくる)。1205年にガルサンドが、マルセイユ大聖堂参事会から土地を与えられ、シトー会に属するサン=ポンス女子修道院〔13.1.4a〕を創建したが、その際に、サン=マルタン礼拝堂もサン=ポンス修道院の所有となった。現在のサン=マルタン礼拝堂の建物は、サン=ポンス女子修道院創建の後にあたる13世紀後半のもので、プロヴァンス・ロマネスク後期に属する。この場所から西へおよそ300メートルの山腹にあったジェムノスの旧集落（Gémenos-le-Vieux／現在は廃墟の一部が残るのみ）の住民のための教区礼拝堂（chapelle paroissiale）でもあった。

サン=マルタン礼拝堂は、プロヴァンスでしばしば見られるタイプの小さな聖堂で、身廊の外側には南北それぞれに3つの扶壁（頭部は斜めに切られている）が並び、身廊東端には鐘を吊るすベ이가2つ横に並ぶ鐘楼が立ち上がる。そのさらに東側には、身廊よりも低い半円形の後陣が作られている。鐘楼の下部（内部では凱旋アーチの部分）および、身廊第2ベイ南側上部に小さな方形の窓が開けられているだけで、それ以外には窓はない。全体的に後世の改修・修復が繰り返し加えられて今日に至る（最近の修復工事は1995年）。

西ファサードは切妻形の屋根で、扶壁が左右（南北）に付けられているために横幅が広く見える。中央に開けられた扉口は、この礼拝堂の中では最も古い部分であるとされる（13世紀後半）。礼拝堂全体が不整形の中小石材が乱積みされているのに対して、扉口は切り整えられた中石材がきれいに積まれたものとなっている。とりわけその扉口の上に架かる半円形のアーキヴォルトは台形のクラヴォーが美しく組まれ、さらにその外側を方形と半円形の断面が組み合わされたモールディングによって縁取られている。当初この聖堂を所有したサン=ポンス修道院の、13世紀中の経済的繁栄ぶりを感じさせる名残であると言える。

礼拝堂内部は、2ベイからなる短い単身廊形式で、東西およそ身廊11メートル、南北幅4.3メートルである。2つのベイは尖頭形の方形横断アーチによって区切られる。横断アーチはインポストを経てやはり方形のピアとなって床まで下りる。水平のコーニスの上には尖頭形のヴォールトが架けられている。それは13世紀後半の、半ばゴシック期のものである。凱旋アーチの東側の後陣壁は半円形で、水平のコーニスが巡る。身廊部のコーニスと、北側では同じ高さであるが、南側ではそれよりも少し低い。そのコーニスの上には半ドームが架かる。この後陣

には開口部はない。床には古い石の盛り面がそのまま残されている。身廊部から少し高い位置に作られていたかつての内陣の床がはがされたままの状態なのであろうか。礼拝堂の身廊部分は、この場所がサン＝ボンス県立公園になる以前、19 世紀の所有者が壁面を白く上塗りしてしまったために、オリジナルの石積みなどを目にすることはできない。1929 年には歴史的建造物（MH）に指定されたが、礼拝堂自体は現在も個人所有である。

Bibliographie :

Bouiron, et al. (2023) pp.191-196; Saurel (1863) pp.73-74; Verlinden (2005) p.143; RIP.

13.1.4c ジェムノス／サン＝ジャン＝ドゥ＝ガルギエ小修道院

(Prieuré de Saint-Jean-de-Garguier, Gémenos)

ジェムノスのコミューンの西端(隣接するオーバーニュのコミューンとの境界)に位置する。ジェムノスの町役場の南 100 メートルの所にある大きなロータリーから県道 D396 を北西へ約 2 キロ行ったところで北へ折れて D43D に入る。700 メートルほど細い道を進むとサン＝ジャン＝ドゥ＝ガルギエ修道院に至る。

このあたりには、紀元前 6 世紀にはすでにマッサリア（現マルセイユ）のフォカイア人による集落があったようであるが、さらにローマ時代にはヴィラが営まれ、2 世紀にはこの地は「ガルガリウス」(locus Gargarius) と呼ばれた。現在のプリウレの敷地内やその周辺で古代後期の石棺などが数多く見つかっている。バッカス、あるいはディアナに捧げられた神殿もあったようであるが、中世になるとその場所にキリスト教の聖堂が建てられ、プリウレが営まれた。417 年には初代マルセイユ司教とされるオレシウス Oresius（正確な在位年不詳）が、ガルガリウスに教区を設定し、新たに司教を任命したうえで自分の影響下に置いた。ガルガリウスはマルセイユ司教区の中でも最も古い教区（paroisse）となったのであるが、この地を自分の管轄としていたアルル司教の反発を受け、最終的には教皇ゾシムス（在位 417-418 年）によってガルガリウス司教任命は取り消されている。

それ以降もガルガリウスには住民が住み続けていたが（プリウレの周囲からは初期キリスト教時代の墓地が発見されている）、8 世紀頃になると、住民たちはもっぱらイスラーム勢力による攻撃・略奪を避けるために平地のこの場所を放棄し、より防御に適した高い場所に移り、そこにサン＝クレール礼拝堂 [13.1.4d] を建てた。イスラームの脅威がなくなった 10 世紀以降、住民たちが平地に戻るとともに、サン＝ジャン＝ドゥ＝ガルギエのプリウレは、1205 年に創建されたサン＝ボンス・シトー会女子修道院の付属施設となった。ただし A. Saurel は、13 世紀にはこの地のプリウレはなくなってしまい、現在のプリウレは 17 世紀（1646 年）に再建されたものであるとして



13.1.4c Saint-Jean-de-Garguier

いる。いずれにせよ、現在残るブリウレの建物はやはり 17 世紀のもので、大革命の際の破壊を経たものである。革命前のブリウレは、洗礼者ヨハネを崇敬する巡礼や病氣療養者たちを受け入れるなどしていたが、革命によって国有財産として売却された。所有者はその後何人も入れ替わるが、20 世紀になってここを所有していたカゼヌーヴ (Cazeneuve) 家が、ブリウレと礼拝堂の再建に尽力し、再び巡礼がやって来るようになった。1952 年には同家がブリウレをマルセイユ司教区に寄贈し、礼拝が復活するとともに、引き続き巡礼を受け入れるようになった。

現在のブリウレは、南北方向に向けて建てられた礼拝堂と、その北側に附属施設の建物が並ぶ。ロマネスク的な雰囲気がかろうじて感じられるのは、礼拝堂東壁の扉口の斜め右上に残されている半円頭形のアーチが 2 つ並ぶニッチ (2 つのアーチは中央の細長い小円柱が受け止める) と、礼拝堂南壁に開けられた 2 つの半円頭形の窓くらいであろうか。礼拝堂の内部は主身廊の東西に側廊が付く三廊式で、平面形の内陣には洗礼者ヨハネがイエスに洗礼を施す様子を描いた絵画が掲げられている。側廊の側壁には所狭しと奉納画 (ex-voto) が並べられている。その数はおおよそ 300 で、最も古いものは 15 世紀に作られたものである。

なおこのブリウレから県道 D43D を 100 メートルほど南に行ったところにある農家の建物の西角の壁 (県道に面している) に、ライオンの頭部の彫像が埋め込まれている。かなり摩滅・破損しているが、後ろ脚とたてがみが認められる。恐らくは古代のヴィラの建物あるいは墓を飾っていたものと思われ、この地のはるか遠い記憶を今に伝えるものである。

Bibliographie :

Bouiron, et al. (2023) pp.191-196; Bousquet-Duquesne et Le Gac (2009) pp.70-71, p.96; CAG(13/3) pp.813-818; Codou (2008) pp.195-212; Féraud (1986) pp.109-111; Féraud (1987) pp.181-182; Gros et Féraud (1987) pp.3-45, pp.75-90; Saurel (1863) pp.13-32.

13.1.4d ジェムノス／サン＝クレール礼拝堂 (Chapelle Saint-Clair, Gémenos)

ジェムノス・サン＝ジャン＝ドゥ＝ガルギエのブリウレ [13.1.4c] のちょうど前から、東に向けてサント＝ボーム山塊に連なる高地へと向けて登っていく道「サン＝クレールの道」(Chemin de Saint-Clair) がある。それを進んでアマンディエの新興住宅地を過ぎるとすぐに車両通行禁止となるので (車両止めのゲートがある)、そこからは徒歩でダートの林道を登ることになる。サン＝クレール溪谷 (Vallon de Saint-Clair) を右手に見下ろしながら 1.5 キロほど歩くと、左手の山の上にあるサン＝クレール礼拝堂と古い城塞の塔の遺構に通じる道が分かれるので、それをさらに 300 メートルほど登る。

この場所に人が住んでいたオッピドゥム (要塞集落) の痕跡は、古くは鉄器時代後期にまでさかのぼる。古代の集落は平地のサン＝ジャン＝ドゥ＝ガルギエにあったが、このオッピドゥムは古代ガロ＝ローマ時代になっても存続し、そこでは発掘によって 4 世紀の陶器類の破片などが見つかっている。このオッピドゥムは城壁で囲まれていた。現在見られる四角い塔も古代のものであるが、4 世紀のうちに火災でその塔の上にあった建物は消失したようで、後のサン＝クレール礼拝堂の後陣は、残された塔の下半分を土台としてその上に建設されたものである。



13.1.4d Saint-Clair de Gémenos et sa citerne

古代からサン＝クレール礼拝堂の南西側にあった泉水は知られており、泉と結びついた礼拝所もあったようである。8世紀以降に、イスラーム勢力による略奪を避けて平地のサン＝ジャン＝ドゥ＝ガルギエから住民たちがこの場所に移住するが、そうした脅威がなくなった後、住民たちは再び平地に戻っていった。サン＝クレール礼拝堂が建設されたのは10世紀から11世紀で、ブーシュ＝デュ＝ローヌ県の中でも最も古いものの1つであるとされる。その名が最初に史料に現れるのは1153年の教皇アナスタシウス4世（在位1153-1154年）の勅書においてである。1205年にガルサンドがマルセイユ司教とマルセイユ大聖堂参事会から土地を与えられてサン＝ポンス女子修道院〔13.1.4a〕を創建した際には、サン＝マルタン礼拝堂〔13.1.4b〕とともに、このサン＝クレール礼拝堂もサン＝ポンス修道院に与えられた。1407年にこのサン＝ポンス修道院がイエールのラルマナール修道院と合併してそこに移った後は、サン＝クレールもラルマナールの所有となった。

中世の後半期にはサン＝クレールは小さなエルミタージュ（隠修所）となり、わずかな隠修士が住むだけの場所となったようである。彼らも17世紀には完全にいなくなるが、礼拝堂自体は18世紀末まで地元の小巡礼地であり続けた。そもそも聖クレール（saint Clair du Dauphiné）は、ヴィエンヌ（イゼール県）のサン＝マルセル修道院院長だった人物で、眼病を癒やす力を持っていたとされる聖人である。礼拝堂の南西に湧く泉の水には、眼病を治癒する効能があると信じられ、聖クレールへの崇敬とも相まって、病の快癒を祈願する巡礼を集めたのであった。現在でも毎年1月2日には、ジェムノスの住民による巡礼が行われる。

礼拝堂は、標高およそ400メートルの山の上にあつて、そこからはサン＝クレールの谷とジェムノスからサント＝ボームへと連なる山々を見渡すことができる。10世紀にまでさかのぼるとされる身廊部は、古代のオッピドゥムの東端の城壁に沿って東西方向に向いており、先にも触れたように、後陣はその城壁に作られた古代の方形塔の土台部分の上に建てられている。外（東側）から見ると、塔の下半分と上半分の石積みの様子が異なっているのが分かる。古代の下半分の方が、整形された中石材がていねいに積み重ねられており、後陣部分外壁である上半分は角部を除いて、不整形の小石材がランダムに積み重ねられている。J.-P. Féraudによると、塔の下半分の古い部分には4世紀あるいは5世紀頃の火災の跡が認められるという。

礼拝堂では 1960 年代になって考古学的な発掘調査が進められ、1980 年には大々的な修復工事が行われた。東西長（内寸）約 7 メートル、南北幅約 4.5 メートルの小規模な単身廊形式で、東端は古代の塔の上に建てられた外側が方形の後陣である。身廊をベイに区切る横断アーチやそれを受けるピラストルなどは見られないが、身廊の東側およそ 2 メートルは、18 世紀になって南北両側に壁面の張り出しが増築されて後陣と同じ南北幅に狭められている。北側の張り出しには聖具などを置くための半円頭形のニッチが作られている。身廊の壁面は不整形の小石材が粗く積まれている。身廊北側は南側よりも壁面が残されており、最も高いところで約 6 メートルである。天井のヴォールトは、身廊部分では完全に失われている。身廊南壁の中ほどに、礼拝堂内部への出入口があるが、そのすぐ東側には、身廊外部の南側に増築された方形の部屋との間を行き来するための出入口が開けられており、西側には半円頭形の窓が開けられている。身廊の西壁には開口部は見られない。

後陣の外側は、古代の方形の塔の土台の上であって平面形であるが、内陣側（後陣内部）は半円形である。中央に大きな方形の窓が開けられ、その左右には方形のニッチが作られている。内陣南端にも小さな方形の窓が開けられている。その窓のすぐ斜め右下には、身廊外部南側の部屋に通じる長方形の出入口があるが、現在は埋められている。内陣の上には半ドームが架けられている（水平のコーニスなどはない）。内陣の壁面および半ドームは外部と同様に不整形の小石材によるランダムな石積みとなっている。身廊と後陣の間であって後陣の天井の断面を示すアーチ（凱旋アーチか）は、尖頭形となっている。

礼拝堂のすぐ南西側には、先にも触れたように、古代から眼病の治癒を願う巡礼たちを集めてきた泉水の跡が残されている。石積みの壁で囲われた四角い井戸のようになっており（2.5m×2.2m）、上には半円形のヴォールトが架けられている。井戸内部の壁面は赤く着色されたモルタルが塗られている。この井戸の構造物自体は 12 世紀ロマネスク期のものである。

Bibliographie :

Bouiron, et al. (2023) pp.191-196; *CAG* (13/3) pp.813-814; Féraud (1991) pp.101-102; Gros et Féraud (1987) pp.46-75.

13.1.5 ロクフォール＝ラ＝ベドゥール／サン＝タンダレ礼拝堂

(Chapelle Saint-André, Roquefort-la-Bédoule)

ロクフォール＝ラ＝ベドゥールは、オーバーニュのすぐ南に隣接するコミューンで、街の中心にある町役場（mairie）までは、オーバーニュから南へおよそ 8 キロである。その町役場から県道 D1 を東へ 7 キロ行ったところで D3D に入り南に 2 キロほど進むと、今度は西へ向けて山を登る細いダートがある。車両進入禁止なので、そこからは徒歩でさらに 2 キロ歩いて登ると、右手の岩山の上に建つサン＝タンダレ礼拝堂が見えてくる。

かつてこの場所には、12 世紀前半には史料にその名が現れるノートル＝ダム＝ドゥ＝ジュラン礼拝堂（Chapelle Notre-Dame-de-Julhans）があった。現在のサン＝タンダレ礼拝堂の建物は 1240 年に建て替えられたもので、しかも 1980 年代になって大々的に修復再建工事が行われ、

外観は非常にきれいな状態に復元されている。外寸は西ファサードから後陣まで東西が 14 メートル、南北が 6 メートルである。山の斜面に建てられていることもあって、西ファサードの扉口は、中央よりも北寄りのところに開けられている。そのアーキヴォルトは長さのあるクラヴォーがきれいな扇状に並べられている。扉口の上には十字形の小さな開口部がある。身廊南壁にも小さなロマネスク様式の窓が 2 つ開けられている。北壁には開口部はない。身廊の 4 つの角部はボサージュ仕様となっている。小さな鐘楼が身廊の東端の上に立つが、これも 1980 年代の修復の際に再建された新しいものである。後陣は半円形で、斜面に建てられているために、北側よりも南側の方が高さがある。後陣の中央には細長い銃眼のような半円頭形の窓が開けられている。その頭部はモノリスである。

礼拝堂内部は身廊が 2 ペイからなり、天井は半円形のトンネル・ヴォールトである。ただしペイを区切る横断アーチはわずかに尖頭形となっている。横断アーチはヴォールトの起拱部に水平に巡るコーニスのところに作られたコーベル(あるいはキュ・ドゥ・ランプ cul-de-lampe)が受け止め、床まで下りるピラストルはない。このコーベルは斜めに切られており、これは例えばドローム県にあるエトワール＝シュル＝ローヌのノートル＝ダム教会 [26.2.7]、そしてシトー会のレオンセル修道院 [26.2.14] などにも見られるものである。横断アーチで区切られた 2 つのペイの南側には、それぞれ隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。身廊東側の凱旋アーチは、内陣のヴォールト、身廊のヴォールトに架けられた横断アーチともに尖頭形である。中央には西ファサードと同じように十字形の開口部が見られるが、これは現在は埋められていて、外部からはまったく分からない。尖頭形の凱旋アーチの東側は、身廊よりも 2 段高くなった内陣で、中央に隅切りされた半円頭形の窓が開く。その上には半ドームが架けられている。礼拝堂の内外には、十字形の開口部以外には装飾的要素はまったく見られない。これもまたシトー修道会の影響であろうか。

サン＝タンドレ礼拝堂の場所から、平地をはさんで西へ 500 メートル離れた山の上には、中世の古いロクフォールの旧集落の遺構 (Roquefort-le-Vieux) が残されている。やはりノートル＝ダムと呼ばれた古い礼拝堂を中心に住居が集まっていた。16 世紀までは住民がいたが、その後放棄されて完全に廃墟化した。礼拝堂の建物もその土台をкаろうじて残すのみである。この旧集落の遺構へのアクセスは、現在は困難となっている。

Bibliographie :

Raynaud (2008) pp.48-49.

13.1.6 シミアヌ＝コロング／サン＝ジェルマン礼拝堂

(Chapelle Saint-Germain, Simiane-Collongue)

シミアヌ＝コロングは、マルセイユのすぐ北に隣接するコミューンである。マルセイユから高速道路 A7 と A51 で北へおよそ 20 キロ走り、2 番の出口で降りて県道 D6 に入る。3 キロほど東へ向かい、さらに D59 に入って 1.5 キロほど進むと、シミアヌ＝コロングの現在の町役場がある。サン＝ジェルマン礼拝堂へは、そこからさらに同名の「サン＝ジェルマンの道」(Route

de Saint-Germain) を南へ 3 キロである。

もともこの地はコロングとだけ呼ばれていた。中世のコロングは、現在の町役場のある旧市街で、その旧市街を見下ろすようにして封建時代の城が小山の上に建てられていた(今は時計塔となった主塔の遺構が残る)。1382 年にプロヴァンス女伯でナポリ女王でもあったジョアンナ 1 世 (Joanna I) が暗殺されると、その後継を巡ってナポリ王カルロ 3 世 (シャルル・ドゥ・デュラス Charles de Duras / ジョアンナ暗殺の首謀者と目される) とアンジュー家のルイ 1 世 (Louis Ier d'Anjou) の間で争いが起こる。プロヴァンスの諸都市が集まって結成したいわゆるエクス同盟



13.1.6 Saint-Germain de
Simiane-Collongue

(Union d'Aix) が前者を支持し、コロングもエクス同盟の一員としてアンジュー家と対立した。この後継争いは、プロヴァンス伯に関してはルイ 1 世とその妻マリー・ドゥ・ブロワの息子であるルイ 2 世が勝利を収めたのであるが、コロングは 1384 年にアンジュー家を支持するマルセイユ軍によって攻囲され降伏している。なお後のプロヴァンス伯ルネ・ダンジュー (善王ルネ) はこのルイ 2 世の息子である。

コロングはその後、幾たびも領主家が入替わり、17 世紀になってプロヴァンスの有力貴族であるシミアヌ家が手に入れた。コミューンの名が現在のシミアヌ=コロングとなったのは 20 世紀になってからのことである。

サン=ジェルマン礼拝堂は、サン=ジェルマン=ドゥ=ヴェネル (Saint-Germain-de-Venel) 礼拝堂とも呼ばれ、旧市街の南約 3 キロの少し開けた盆地の南側に位置する。ここからさらに南に向けてはピロン・デュ・ロワ (Pilon-du-Roi) と呼ばれる高い断崖やエトワール山地へと連なる森が広がる。この場所には古代の聖域 (神殿) があったとも言われる。中世になってここに創建されていたベネディクト派のプリウレとその聖堂は、11 世紀半ばにはマルセイユのサン=ヴィクトール修道院が所有した。その時代のプリウレの建物の遺構が、礼拝堂のすぐ南側に残されている。

礼拝堂の身廊は南北方向に向けて建てられている。その外壁は、不整形の小石材の荒積みである。扉口は切妻形の北側ファサードに開けられている。半円頭形のシンプルなもの、その左右両側には方形の窓が開けられている。中央の扉口の上には半円形のニッチがあって現代アート風の彫刻が置かれており、さらにその上には丸窓が開けられている。

身廊の西側には末広がりとなった台形状の扶壁が 2 つ、東側には 1 つ付けられて壁面を支えている。身廊西側に開口部はない。東側には聖具室や物置らしき大きな建物 (煙突が作られている) が増築されている。南側ファサードは、特に西側に向けて作られていた扶壁を兼ねた幅のある壁が残っている。かつてのプリウレの建物の名残であろうか。この南側ファサードの上には高さのある鐘楼が立ち上がる。方形の内陣部には東側壁面に半円頭形の小さな窓が開けら

れている。南側壁面には開口部はない。

礼拝堂内部は単身廊形式である。外壁同様に不整形の小石材が乱積みされており、南ファサードと内陣東壁の小さな窓以外には開口部がないので、古くて暗い洞窟の中にいるような印象を受ける。身廊には2つの横断アーチが架かり、3つのベイを区切っている。各ベイの天井はモルタルで上塗りされた交差ヴォールトである。力強い凱旋アーチの南側は身廊よりも東西幅の小さな方形の内陣である。内陣の天井は少し歪んだ半円筒形ヴォールトとなっている。内陣（後陣）には東壁に小さな窓が開けられているが、南壁には開口部はない。この内陣に置かれている祭壇は、再利用された古代の墓石（部分的に破損している）の上に、5世紀頃の祭壇テーブルが載せられたものである。墓石の墓碑には«*Vinicius Eudrepites*»の名が刻まれている。また祭壇テーブルの前面および左右の側面にはパルメットの唐草文様（フリーズ）などが彫刻されている。

サン＝ジェルマン礼拝堂のすぐ北には、1997年になってベネディクト会の聖リオバ修道院（*Monastère Sainte-Lioba*）が作られた。もとは1935年に *Hildegard Michaelis* によってオランダで創建された女子修道会である。サン＝ジェルマン礼拝堂はこの聖リオバ修道院によって今も修復・維持されている。

Bibliographie :

CAG, 13/4, p.683; *Narasawa* (2015) pp.346-347; *Raynaud* (2008) pp.25-26; *RIP*.

13.1.7a ブーク＝ベル＝エール／サン＝タンヌ礼拝堂（*Chapelle Sainte-Anne, Bouc-Bel-Air*）

ブーク＝ベル＝エールは、マルセイユとエクス＝アン＝プロヴァンスの中ほどの少しエクス寄りのところに位置するコミューンである。マルセイユからだと、オートルート A7 に乗ったあとエクス方面に向かう A51 に乗り、2番出口で下りる。県道 D8N を北へ2キロで県道 D60A が分岐するので、それを東へ1キロ進み、今度は D59 に入って北へ約1キロでブーク＝ベル＝エールの町役場がある旧市街に至る。エクス＝アン＝プロヴァンスからだと南へ約10キロである。

ブーク＝ベル＝エールの旧集落の中心には大きな岩場が立ち上がる。中世にはブッコ城塞（*Castrum Bucco*）が作られ、ブークの領地とともにプロヴァンス伯（12世紀にはバルセロナ伯家、14世紀からはアンジュー家）の支配下にあった。18世紀になるとマルセイユのアルベルタス家がブークを手に入れ、城塞の西方に豪華なルネサンス式庭園（*Jardin d'Albertas*）を造営するなどした。一方、城塞のすぐ東側にはサン＝タンンドレ教会（*Église Saint-André*）が建っている。もともとは11世紀後半に建設され、1098年には教区教会として史料にその名が現れる。最初はマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院が所有した。建物は改修と再建が繰り返されたものである。西ファサードが建設当時のものであるとも言われる。壁面の石積みなどは12世紀のロマネスク的な雰囲気が感じられはするが、しかし少なくともそこに作られた扉口はゴシック的である。

ブーク＝ベル＝エールのサン＝タンヌ礼拝堂は、町役場のある「オテル・ドゥ・ヴィル広場」から「1915年4月24日通り」（*Avenue du 24 Avril 1915*）を100メートルほど北へ向かい、

さらに「ジャン・ジョレス通り」(Avenue Jean Jaurès)に入って 220 メートル北へ行くと、向かって左側(東側)に入る「シャペル小路」(Impasse de la Chapelle)がある。サン=タンヌはその小路に 30 メートルほど入ったところの右(北)側にある。小路から奥まったところの、つい見過ごしてしまいそうな場所である。

建物はおよそ南北方向を向いており、南ファサードは、左右両側の壁が下から段々状に一番上の頭頂部まで迫り上がっていくように作られている。一番外側は扶壁である。ファサード中央に



13.1.7a Sainte-Anne de Bouc-Bel-Air

開けられた扉口は、下半分の方形の出入口に対して上半分が大きな半円形のアーチとなっており、まるで大きなキノコ状の形をしている。一番上の鐘楼のような頭頂部は、普通の聖堂建築では鐘を吊るすためのベイが開くのであろうが、ここでそうしたベイの代わりに半円形のニッチが作られ、その中には着色された聖アンナとマリアの像が置かれている。聖アンナは右腕でマリアを抱き、左手には錨を持っている。二人とも金色の王冠をかぶっている。礼拝堂外部の側壁はコンクリートで固められており、窓などはない。後陣は平面形である。やはり窓はない。

礼拝堂の内部は飾り気のない洞窟のようになっている。形もバラバラな不整形の小石材がモルタルによって固められている。天井は半円筒形トンネル・ヴォールトで、横断アーチもピラストルもない。壁面には開口部も全くない。一番奥の壁は平面形で、着色された聖アンナとマリアの像(最近のもの)がテーブルの上に置かれているだけである。サン=タンヌ礼拝堂は、ブーク=ベル=エールにおいて、最も古い聖堂であるとされる。S. Panarotto によれば、その建設は 11 世紀までさかのぼる。しかし現在の状態からすると、半ば物置のように使われていることもあって、残念なことにあまり古さは感じられない。

Bibliographie :

Panarotto (2007) p.86; Raynaud (2008) pp.26-27, RIP.

13.1.7b ブーク=ベル=エール／ノートル=ダム=ドゥ=レスペランス礼拝堂

(Chapelle Notre-Dame-de-l'Espérance, Bouc-Bel-Air)

ブーク=ベル=エールのノートル=ダム=ドゥ=レスペランス礼拝堂は、旧市街の西にある小丘の上にある。町役場から「ド・ゴール將軍通り」(Avenue du Général de Gaulle)を西へ 150 メートル行くと、小丘に向かう狭い「レ・リスの道」(Chemin des Lys)が左に分かれるので、それを約 400 メートル登ると礼拝堂に至る。

別名「ボンヌ=メール礼拝堂」(Chapelle de la Bonne-mère)とも呼ばれる。古くからこの地域の巡礼地であったが、現在でも復活祭翌日と聖母被昇天祭には行列が行われる。もともとは 12 世紀にさかのぼる聖堂とされるが、現在の建物にはさほど古さは感じられない。通常の聖堂

建築と異なり、後陣が西側に、そして扉口は東側に向けて建設されている。身廊は東西に長く（もともとは短かった）西端の後陣は半円形である。建物の外側は全体にわたってモルタルによって上塗りされている。身廊の東側は西側よりも南北幅があり、外側に扶壁が付けられている。東ファサードは飾り気のないもので、方形の扉口、その上に大きな丸窓、そして一番上に小さな鐘楼が立つ。この鐘楼は 20 世紀になって再建されたものである。後陣の中央には方形の窓が開けられている。

聖堂内部は単身廊形式で側廊やトランセプトはない。天井にはわずかに尖頭形となった円筒形ヴォールトが架かる。身廊のヴォールトには 19 世紀頃のものと思われるフレスコ画装飾が残されている。半円形の内陣（後陣）は現在は聖具室として使われおり、身廊の西端に壁を作ってそこに祭壇が設置され、その上には 18 世紀頃のものと思われる聖母子像が置かれている。かつて室内には 18-19 世紀の多数の奉納画（ex-voto）が飾られていた。最も古いのは 1682 年のものとされる。現在それらは旧市街のサン＝タンンドレ教会に移されて保管されている。

Bibliographie :

Commune de Bouc-Bel-Air (2024) pp.27-28; Panarotto (2007) p.86.

13.1.8a カブリエス／ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ナティヴィテ教会

(Église Notre-Dame-de-la-Nativité, Cabriès)

カブリエス（より正確には「キャブリエス」が現地の発音に近い）はマルセイユの北およそ 15 キロに位置するコミューンである。マルセイユ空港からだと東へおよそ 12 キロである。マルセイユからオートルート A51 に乗って 2 つめの出口で下り、「シャボー通り」（Avenue des Chabauds）を北へ 1.5 キロ行ったところで「ルート・ドゥ・カブリエス」（Route de Cabriès）に入る。そして西へおよそ 1.8 キロ進むとカブリエスの旧市街のすぐ北側の駐車場に至る。この旧市街は、東西に延びる丘陵地の上に家々が肩を寄せ合うようにして集まり、その中に村役場や旧城塞、そしてノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ナティヴィテ教会が建てられている。

カブリエス教会（ecclesiam de Caprarium）の名は、11 世紀末のマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院のカルチュレールに現れる。ただし現在のノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ナティヴィテ教会は、その後 12 世紀に再建されたものである。1204 年の教皇インノケンティウス 3 世（在位 1198-1216 年）の勅書の中に名前（ecclesia de Cabrer）が見出せるのは、そのロマネスク様式の聖堂である。

隣接する封建時代の城（Castrum de Cabriera）も 13 世紀には知られる。カブリエスの領主は、もともとはアルルに拠点を持っていたポルスレ家（les Porcellets）で、トレビラーヌ（Trébillane）、すなわち現在はカブリエスのコミューン内にあるカラス（Calas）の地所を共に所有していた。14 世紀後半にはカブリエス＝トレビラーヌはアグー家（Les Agoults）が引き継いでいく。1382 年に起こったナポリ女王でプロヴァンス女伯でもあったジョアンナ 1 世（Joanna I）の没後の後継争いでは、ナポリ王カルロ 3 世（シャルル・ドゥ・デュラス）とアンジュー家のルイ 1 世（Louis Ier d'Anjou）が対立するが、プロヴァンスの諸都市が集まって

結成したエクス同盟 (Union d'Aix) が前者を支持したのに対して、カブリエスの領主であったアグー家のベルトラン (Bertrand d'Agout) は後者を支持している。この後継争いは、プロヴァンス伯に関してはアンジュー家側が勝利を収め、1384年にルイ1世とその妻マリー・ドゥ・ブロワの息子であるルイ2世が伯位を継いでいる。後に善王ルネと呼ばれることになるプロヴァンス伯ルネ・ダンジューはこのルイ2世の息子である。15世紀にカブリエスの領主となっていたヴァンティミル家のベルトラン (Bertrand de Vintimille) はルネ・ダンジューに臣従している。

ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ナティヴィテ教会は、カブリエス旧市街の中心から少し西寄りのところであって、今も教区教会としての役割を果たしている。封建時代の城の西側に、集落の囲壁に作られた方形の塔（その下には旧市街への城門が開けられている）があり、現在はノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝ナティヴィテ教会の後陣に接する鐘塔となっている。身廊部南側には、1階に聖堂内部に開けられたロマネスク様式の半円頭形の窓が並ぶが、その上の2階部分は珍しいことに聖堂の上に作られた司祭館 (presbytère) で、方形の窓が並んでいる。さらにその上には司祭館の屋根裏の建物が作られている。中世期の集落の限られた空間の中に城や教区教会、住民たちの住居などを集める必要上、司祭館を身廊の上に建てたのであろうが、その重量が聖堂にかかる負荷は相当なもので、後の時代に聖堂全体にさまざまな歪みをもたらすことになる。なおこの司祭館の建設年代は正確には分からないが、D. Berthoutによれば、12世紀ロマネスク期に再建された当初からそのように作られたものであるという。

聖堂の中には10段の石段を上り、西ファサードに開けられた19世紀の新古典様式の扉口から入る。内部の基本プランは3ベイからなる東西およそ20メートルの単身廊形式である。身廊の南北両側には二重の尖頭アーチで分けられた礼拝室が並ぶが、それらの礼拝室を分ける壁には通路が開けられているので、あたかも身廊両側に側廊が付けられた三廊式のようにも見える。身廊の上の司祭館を建設当初からのものであるとするD. Berthoutによれば、これもまた最初から「三廊式」として建設されたものであるという。南北の祭室（あるいは側廊）を含めた南北幅は約11メートルである。

身廊の天井は、水平のコーニス（南側のそれには連続する星形彫刻が施されている）の上に高さ約8.5メートルの尖頭形のトンネル・ヴォールトが架けられている。モールディングが付けられた二重の尖頭形横断アーチがベイを区切り、その横断アーチは、側廊様の礼拝室と身廊を分けるピア（束ね柱）に合体する方形のピラストルとなって床まで下りている。身廊の東側は方形の内陣で、その天井はリブのない交差ヴォールトである。このヴォールトは、1747年に落雷で被害を受けて再建されたものである。

後陣東壁は平面形となっている。その東壁には、古典様式の柱とペディメントが形作る枠組みの中に、聖母子を描いた17世紀の絵画がはめ込まれている。堂内には、ヴォールト起拱部に巡るコーニスや、横断アーチを受けるピラストルの柱頭部分に、パルメット、星形図形、簡素なアカンサスなどのロマネスク期のものと思われる彫刻装飾が断片的に残されている。第2ベイ北側の礼拝室には、ピエタ、聖カトリヌ（聖カタリナ）、聖アントワヌ（聖アントニオ）が描かれた16世紀の三連式祭壇画が飾られている。

Bibliographie :

Berthout (2006) pp.76-79; Raynaud (2008) pp.28-29.

WS : « Site officiel de Cabriès »

13.1.8b カブリエス／サン＝ラファエル礼拝堂（Chapelle Saint-Raphaël, Cabriès）

サン＝ラファエル礼拝堂は、カブリエスの旧市街の北の駐車場から、北西へ約 100 メートルほど歩いたところにある古い墓地の中に建っている。いわゆる墓地聖堂であるが、小ぶりな身廊とその東端に半円形の後陣が付き、さらに西ファサードの上に小さな鐘楼が立つところなどは、典型的なプロヴァンスのロマネスク小聖堂であると言える。

もともと墓地のあるこの場所には古代後期あるいは初期キリスト教時代から古い聖堂があった。現在のサン＝ラファエル礼拝堂は、12 世紀になって建てられたものであるが、カブリエスの中では最古のキリスト教聖堂である。長いこと墓地聖堂としての役割を果たしてきたもので、1776 年まで堂内の床下にも死者が埋葬された。大天使ラファエルはカブリエスの守護天使であり、1720 年のマルセイユの大ペスト禍の際には、カブリエスの村を守って疫病による被害を防いだと信じられている。言い伝えによると、自分たちもそうした御利益にあずかろうとしたブーク＝ベル＝エール [13.1.6] の住民が、ある夜に密かにこの礼拝堂から聖ラファエルの像を盗もうとしたが、この像が急に非常に重たくなってとても運ぶことが出来なくなった。恐ろしさのあまり彼らは途中でその像を放置したまま逃げ出してしまったという。

礼拝堂の平面プランは小規模な単身廊形式である。正確な時期は不明であるが、後の時代に身廊北側に礼拝室が増築されている。壁面は身廊の角部を除いて全体的に不整形の小石材が粗く積み、石材の間はモルタルで固められている。身廊部には扶壁はない。西ファサードと身廊北壁には開口部は見られない。扉口は、セグメンタル・アーチが架けられた長方形のものが身廊南側に開けられている。扉口の向かってすぐ右上に小さな窓が開けられている。半円形の後陣には現在は開口部は見られないが、内部から見るとかつて開けられていた小さな窓の痕跡が残されているので、いつの頃か埋められてしまったのであろう。西ファサードの上に小さな鐘楼が立つ。吊るされている鐘は 1821 年のものである。

礼拝堂の内部は身廊の北側に礼拝室が東西に 2 つ並べて作られ、それが通路でつながれているので側廊のようである。身廊の東西長（内寸）は 8.5 メートル、礼拝室を含めた南北幅はおよそ 7 メートルである。身廊の南側と増築された礼拝室の壁面の土台部分には石のバンケット（ベンチ）が作られている。身廊の壁面上部には水平に巡るコーニスが巡るが、その上は平天井である。身廊北側の 2 つの礼拝室は南北方向に架けられたトンネル・ヴォールトとなっている。身廊と内陣の間には鉄製の衝立（格子）が



13.1.8b Saint-Raphaël de Cabriès

あり、内陣には金箔の張られた木製の祭壇（18 世紀）が置かれている。その祭壇の上には、かつては旧約に登場する聖ラファエルと魚をつかまえるトビ（トビアス）のエピソードが描かれた 17 世紀の油絵が掲げられていたが、現在その絵は修復のために取り外されている。内陣の東側壁面、すなわち後陣内壁は半円形で、中央には今は埋められている小さなロマネスク様式の窓の痕跡が見られる。その両側には金箔張りの枠組みが付けられた半円頭形のニッチがあり、聖ラファエルとトビの彩色された彫像（18 世紀）が置かれている。後陣の上には半ドームが架けられている。

Bibliographie :

Berthout (2006) pp.85-86; Panarotto (2007) p.87; RIP.

13.1.8c カブリエス／カラスのノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝サレット礼拝堂

(Chapelle Notre-Dame-de-la-Salette de Calas, Cabriès)

カラスはカブリエスのコミューン域の北寄りの所に位置し、カブリエスの旧集落からは県道 D543 を北西におよそ 3.5 キロである。エクス＝アン＝プロヴァンスとマルセイユの中ほどに位置し、ここから西へ 3 キロのところに、2001 年に高速鉄道の新駅（Aix-en-Provence TGV）が開業したこともあって、その後このあたりは新興住宅地の開発が急速に進んでいる。

カラスは古くはカルカリア（*Calcaria*）と呼ばれた。このカラスの宅地の東に広がる畑地では、1960 年代に航空写真によって古代の大きなヴィラの跡が見つかっている（*Villa de Trébillane／Trébillanne*）。東西約 120 メートル、南北約 60 メートルの規模を持ち、紀元前 1 世紀から紀元 3 世紀半ば頃のものとする。

ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝サレット礼拝堂は、カラス地区の南端にあるなだらかな小丘（*Colline de Calas*）の上に建っている。この丘の上には、最初 5 世紀にはすでに小さな聖堂が存在した。カルカリアの住民のための教区教会であったとされ、1082 年にはエクス＝アン＝プロヴァンスのサン＝ソヴール大聖堂参事会が所有していた。その後 12 世紀になって全面的に建て替えられたのであるが、それ以来、幾度となく改修・改築の手が加えられている。15 世紀には戦乱や疫病などによってカルカリアの住民が激減し、礼拝堂も放置されたまま荒廃した。17 世紀になると礼拝堂はカブリエスの司祭に委ねられた。

大革命の後、この礼拝堂はカラス城（礼拝堂の建つ丘のすぐ西にある）の主であったルイーゼ・ガラバク（*Louise Garavaque*）が所有する。彼女は 1865 年に礼拝堂をカブリエスのコミューンに寄贈した。1869 年にはカラスの集落の中に新しく聖母被昇天教会（*Église Notre-Dame-de-l'Assomption*）が建設されたが、彼女はこれに対しても財政的支援を行っている。新しい聖堂建設の間、丘の上の礼拝堂が、多少とも修復されながらカラスの教区教会として使用された。この礼拝堂がノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝サレットの名で呼ばれるようになったのは、1846 年に起こったイゼール県のラ・サレット＝ファラヴォー（*La Salette-Fallavaux*）での聖母出現を記念したことによる。それ以前はノートル＝ダム＝ドゥ＝トレビラーヌ（*Notre-Dame-*



13.1.8c Notre-Dame-de-la-Salette de Calas

de-Trébillane) 礼拝堂と呼ばれていた。建物には 1960 年と 2002 年にも大規模な修復工事の手が加えられている。

ノートル＝ダム＝ドゥ＝ラ＝サレット礼拝堂は、正確には後陣を北東方向に向けて建てられている。その後陣は、拡張されたものである。また身廊南側には司祭館と聖具室が増築されている。南西のファサードは完全に再建されたもので、ほぼ正方形の壁面の中央に方形の扉口がある。その上には丸窓、そして頂部が三角形のペディメントとなった鐘楼が立ち上がる。そこに吊るされた小さな鐘は 1999 年の新しいものである。扉口のすぐ上には、十字架と旗を掲げた神の子羊が彫刻されたパネルがはめ込まれている。これは中世の間この礼拝堂を所有したエクスマン＝プロヴァンスのサン＝ソヴール大聖堂参事会の紋章である。ファサードの左右両側には上部が曲線を描くバロック的な扶壁が付けられている。

身廊の南東側には後代に司祭館（ただし実際に司祭がここに住んだのかどうかは不明）と聖具室が作られた。その壁面はモルタルで上塗りされており、比較的新しいものである。それに対して身廊の北西側の壁面は、不整形の小石材による石積みがそのまま残されており、建物の他の部分よりは歴史の古さを感じさせるものとなっている。その中央には外側に向けて大きく隅切りされたロマネスク様式の窓が開けられている。12 世紀より後の時代に拡張された後陣部分も同様に石積みがそのまま残されており、その石材は身廊部よりも整形されたものが端正に積まれている。後陣の北東端は平面形で、中央に細長くて小さな窓が開けられている。

礼拝堂内部は単身廊形式で、もともとの身廊部分と拡張された内陣（後陣）の 2 つのベイ（区画）に分けられる。天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトである。身廊部のヴォールトの方が内陣部のそれよりも横幅がある。ベイを分ける横断アーチはない。また身廊部の壁面はヴォールトも含めて漆喰で上塗りされているが、内陣部の壁面は石積みがそのままなので、どちらかと言うと内陣部の方が古いものであるかのように見える。内陣の側壁にはヴォールトの起拱部に水平のコーニスが付けられている。内陣の奥に向かって左側にはセグメンタル・アーチの大きなニッチがあり、右側には聖具室への通路が付けられている。聖具室への通路は身廊部にもあって、そのすぐ隣には壁面をくり抜いて作られた説教壇が見られる。身廊の反対側（南西端）には鉄製の欄干を備えた 2 階席が作られている。またその 2 階席の壁の上部に開けられた

丸窓には、2002 年の修復工事の際に新たにステンドグラスがはめ込まれている。

Bibliographie :

Berthout (2006) pp.85-86; Berthout (2011) pp.74-77, pp.80-90, pp.120-124; Soyer (1968) pp.206-209; GV; RIP.

略記号と参考文献

各聖堂のビブリオグラフィーでは、和書、翻訳書、欧文文献（ファーストネームは略）、GV と RIP、Web-site (WS) の順に記した。

『新カト』:『新カトリック大事典』新カトリック大事典編纂委員会編、研究社、1996-2009 年。
CAG : *Carte Archéologique de la Gaule*. Paris, Académie des Inscriptions et Belles-Lettres.
GV : Guide de Visite.
RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

中川久嗣「南フランス・イエールの中世キリスト教聖堂」『文明研究』第 35 号、2017 年 3 月、東海大学文明学会、73-96 頁。

西田雅嗣ほか (2009) : 「サン=ポンス・シトー会女子修道院の建築について」、『日本建築学会近畿支部研究報告書』平成 21 年度、909-912 頁。

Allais, J.-M., Démians Archimbaud, Gabrielle, Pelletier, Jean-Pierre (1981) : « Rapport de Fouille 1979 et compte-rendu », dans *Archéologie médiévale*, no.11, 1981, p.280.

Arnaud, E. (1993) : *Roquevaire. Histoire de la ville et de son église, depuis son origine jusqu'à nos jours*, Le Livre d'histoire-Lorisse, Paris, 1993.

Baratier, Édouard, dir. (1969) : *Histoire de Provence*, Édouard Privat, Toulouse, 1969.

———, dir. (1990) : *Histoire de Marseille*, Nouvelle édition, Éditions Privat, Toulouse, 1990.

Barbut, Frédérique, et Nourry, Richard (2012) : *La route des abbayes en Provence*, Éditions Ouest-France, Rennes, 2012.

Berthout, Dominique (2006) : *Carte Archéologique, Monumentale et Artistique du village de Cabriès*, Association d'Archéologie et d'Histoire de Cabriès-Calas, Cabriès, 2006.

——— (2011) : *Carte Archéologique, Monumentale et Artistique du hameau de Calas*, Association d'Archéologie et d'Histoire de Cabriès-Calas, Cabriès, 2011.

Besse, Jean-Martial (1909) : *Abbayes et prieurés de l'ancienne France, tome 2, Provinces ecclésiastiques d'Aix, Arles, Avignon et Embrun*. Ligugé et Paris, 1909.

Bouiron, Marc (2001) : « Histoire et topographie des monuments de Marseille médiévale », dans *Marseille : Trames et paysages urbains de Gyptis au Roi René, Études*

- massaliètes*, no.7, édité par Marc Bouiron et Henri Tréziny, Édisud, Aix-en-Provence, 2001, pp.255-276.
- Bouiron, Marc, et al. (2023) : *Le Guide des sites de l'antiquité tardive et du haut moyen âge Ve-XIe s. (Le Guide des sites de l'antiquité au moyen âge)* , Provence-Alpes-Côte-d'Azur, Éditions Mémoires Millénaires, Saint-Laurent-du-Var, 2023.
- Busquet, Raoul (1945) : *Histoire de Marseille*, Robert Laffon et Jeanne Laffitte, 1945.
- Bousquet-Duquesne, Elisabeth, et Le Gac, Herve (2009) : *Chapelles de Provence*, Éditions Ouest-France, Rennes, 2009.
- Cantel, J.-B (1874) : « Monographie de Notre-Dame du Mont-Carmel à Marseille », dans *Revue de Marseille et de Provence*, 1874, pp.377-396.
- Codou, Yann (2008) : « Aux confins du diocèse Limites, enclaves et saints diocésains en Provence au Moyen Âge », dans *L'espace du diocèse : Genèse d'un territoire dans l'Occident médiéval (Ve-XIIIe siècle)* , sous la direction de Florian Mazel, Presses universitaires de Rennes, Rennes, 2008, pp.195-212.
- Commune de Bouc-Bel-Air (2024) : *Plan Local d'Urbanisme, Révision général*, tome 1, pièce no.1, Annex 2, 2024.
- Duchêne, Roger et Contrucci, Jean (1998) : *Marseille, 2600 ans d'histoire*, Fayard, Poitiers, 1998.
- Féraud, Jean-Baptiste (1986) : « Saint-Jean de Garguier-Locus Gargarius », dans *Études massaliètes*, 1986, pp.109-111.
- (1987) : « Découvertes de Spatheia à Saint-Jean-de-Garguier “Locus Gargarius” », dans *Archéologie du Midi Médiéval*, Année 1987, tome 5, pp.181-182.
- (1991) : « Gémenos, Chapelle Saint-Clair », dans *Bilan scientifique, Bouches-du-Rhône*, 1991, pp.101-102.
- GROS, Lucien et FÉRAUD, Jean-Baptiste (1987) : *Saint-Jean de Garguier, Vingt siècles d'histoire d'un “Haut-Lieu” de Provence*, Comité du Vieux Marseille, Marseille, 1987.
- Guyonnet-Dupeyrat, Roseline (1979) : « L'abbaye de Saint-Pons de Gémenos », dans *Provence historique*, tome 29, fascicule 116, avril-mai-juin 1979, Marseille, pp.131-151.
- Hartman-Virnich, Andréas (2001) : *Églises et chapelles romanes de Provence*, Les Éditions du Huitième Jour, 2001.
- Hartman-Virnich, Andréas et al. (2001) : « L'architecture religieuse médiévale à Marseille », dans *Marseille : Trames et paysages urbains de Gyptis au Roi René*, édités par Marc Bouiron et al., Édisud, Aix-en-Provence, 2001, pp.279-292.
- Morel, Jacques (2008) : *Guide des Abbayes et Prieurés en région Rhône-Alpes*, Éditions Autre Vue, Lyon, 2008.
- Narasawa, Yumi (2015) : *Les autels chrétiens du Sud de la Gaule (Ve-XIIIe siècles)* ,

- Turnhout, Brepols, 2015.
- Panarotto, Serge (2007) : *Chapelles de Provence*, Édisud, Aix-en-Provence, 2007.
- Quemener, Éléonore et Cassely, Jean-Pierre (2017) : *Marseille insolite et secrète*, Éditions Jonglez, 2017.
- Raynaud, Alain (2008) : *Itinéraires-découvertes, les Bouches-du-Rhône, les carnets de route*. Éditions de la Renaudie, Saint-Raphaël, 2008.
- Saurel, Alfred (1863) : *Notice historique sur Saint-Jean de Garguier, l'abbaye de Saint-Pons et Gémenos (Bouches-du-Rhône)*, Marseille, 1863.
- (1877) : *Dictionnaire des villes, villages & hameaux du département des Bouches-du-Rhône*, tome 1, Marseille, 1877.
- (1878) : *Dictionnaire des villes, villages & hameaux du département des Bouches-du-Rhône*. tome 2, Marseille, 1878.
- Servan, Pierre (1960) : « Voies antiques de la moyenne vallée de l'Huveaune », dans *Provence historique*, Fascicule 41, tome 10, 1960, pp.189-221.
- Soyer, Jacqueline (1968) : « Découverte d'emplacements d'habitat gallo-romain dans la Plaine d'Aix. », dans *Revue archéologique de Narbonnaise*, tome 1, 1968, pp.201-218.
- Thomazeau, François (2007) : *Marseille insolite, les trésors cachés de la cité phocéenne*, Éditions Les Beaux jours, Paris, 2007.
- Verlinden, Patrick (2005) : *La Provence Chrétienne*, Éditions les 7 collines, Marseille, 2005.
- La Ville d'Hyères-les-Palmiers, ed. (2013) : *Hyères Patrimoine XII, Saint-Pierre de l'Almanarre, une abbaye de femmes*, 2013, Hyères-les-Palmiers.

Web-site

- « Ermitage Notre-Dame du Mont Carmel Marseille (B.d.Rh) » par Paul Courbon.
<http://www.chroniques-souterraines.fr/dossiers/view/13aygalades.html>
(2026.4.10 アクセス)
- « Site officiel de Cabriès » <https://www.cabries.fr/> (2026.5.25 アクセス)